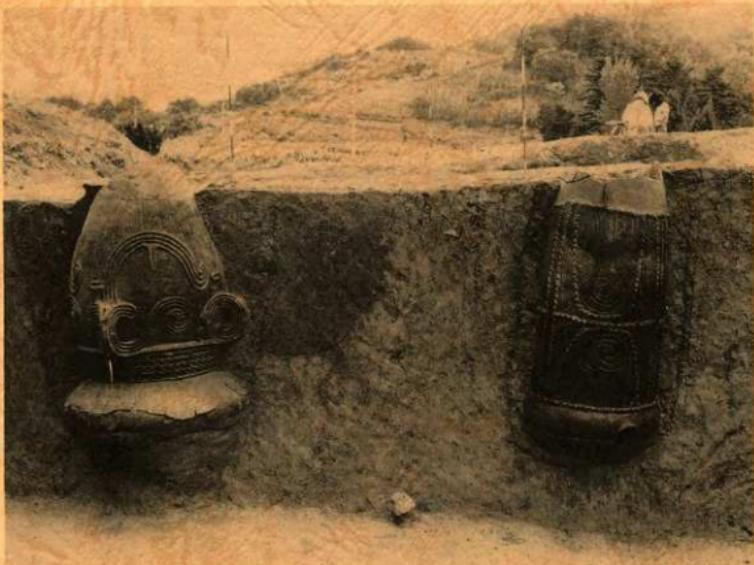


# 宮 の 前 遺 跡

山梨県警察本部ヘリポート建設に伴う発掘調査報告書



1995. 3

山梨県教育委員会

# 宮 の 前 遺 跡

山梨県警察本部ヘリポート建設に伴う発掘調査報告書

1995. 3

## 序

本報告書は山梨県警察本部によるヘリポート建設に先立ち発掘調査された西八代郡市川大門町に所在する宮の前遺跡について、その成果をまとめたものであります。

本遺跡の調査は当センターが開所した1982年に実施されたもので、当時は中央自動車道等大型プロジェクトの整理報告の最盛期であったことなどもあって、12年の間をおいての整理、14年目の報告書刊行となった次第であります。

本遺跡は甲府盆地の南縁、釜無川と笛吹川が合流し富士川となる部分の台地上に立地しておりますが、これまで富士川流域での発掘調査は非常に少なく、県としても初めての組織的な調査となりました。当然のことながらそれまでは考古学的に他地域との比較もできない状態でした。

今回の調査では、13軒の住居跡と6基の土坑、さらに2基の単独埋甕などが確認されました。これにより地域的な空白が埋められることになりましたが、とくに、井戸尻田式期～曾利Ⅰ式期の集落は、これまで県内の他地域でも類例の少なかった時期の例であり、貴重な資料を得ることができました。また、2基の大型単独埋甕は、単独埋甕の典型的な資料として各地に紹介され、広く知られるところとなっております。

本報告書が、より多くの方々の研究資料としてご利用いただきますよう念じてやみません。

本報告書が刊行されるまでには、直接発掘調査に参加された方々をはじめとして、関係機関や地元地区の皆様のお世話になりました。末筆ながら、改めて厚く御礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 例　　言

- 1 本書は、1982年に山梨県警察本部のヘリポート建設に伴って調査された、西八代郡市川大門町宮の前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、山梨県警察本部の依頼を受けて、山梨県教育委員会が実施した。

- 3 発掘調査及び整理作業、報告書作成は山梨県埋蔵文化財センターが行った。担当は以下のとおりである。

発　　掘　　調　　査　　—　坂　　本　　美　　夫　・　長　　沢　　宏　　昌  
整　　理　　作　　業　　—　長　　沢  
報　　告　　書　　執　　筆　　—　長　　沢　・　宮　　里　　学  
編　　集　　—　長　　沢

- 4 写真撮影は遺構を長沢が、遺物を塙原明生（日本写真家協会会員）が行った。
- 5 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	第21図 11号住居跡	第43図 打製石斧 7
第2図 全体図	第22図 11号住居跡埋甕・炉	第44図 打製石斧 8
第3図 旧石器時代石器	第23図 1号～6号土坑	第45図 打製石斧 9
第4図 1号・13号住居跡	第24図 1号・2号単独埋甕	第46図 磨製石斧 1
第5図 2号住居跡	第25図 土器 1	第47図 磨製石斧 2
第6図 2号住居跡炉	第26図 土器 2	第48図 石皿
第7図 3号・5号・12号 住居跡	第27図 土器 3	第49図 磨石 1
第8図 3号・5号・12号 住居跡埋甕・炉	第28図 土器 4	第50図 磨石 2
第9図 4号住居跡	第29図 土器 5	第51図 凹石 1
第10図 4号住居跡炉	第30図 土器 6	第52図 凹石 2
第11図 6号住居跡	第31図 土器 7	第53図 凹石 3
第12図 6号住居跡炉	第32図 土器 8	第54図 特殊石器
第13図 7号住居跡	第33図 土器 9	第55図 多孔石
第14図 7号住居跡炉	第34図 土器 10	第56図 石鎌ほか
第15図 8号住居跡	第35図 土偶・土鉢・土器片鍤	第57図 石匙
第16図 8号住居跡炉	第36図 土製円盤	第58図 スクレイパー
第17図 9号住居跡	第37図 打製石斧 1	第59図 石鍤
第18図 9号住居跡炉	第38図 打製石斧 2	第60図 石棒
第19図 10号住居跡	第39図 打製石斧 3	第61図 遺構変遷図
第20図 10号住居跡炉	第40図 打製石斧 4	第62図 住居型式
	第41図 打製石斧 5	第63図 類似土器
	第42図 打製石斧 6	

## 表目次

表1 遺構遺物対照表

表2 土器（第25図～第34図）出土位置

表3 土偶・土鉢・土器片鍤（第35図）出土位置

表4 土製円盤重量

表5 打製石斧観察表（第37図～第45図以外）

表6 磨石観察表（第49・50図以外）

## 図版目次

図版1 調査風景 1号・13号住居跡 3号・5号・12号住居跡
図版2 4号住居跡 6号住居跡
図版3 8号住居跡 11号住居跡
図版4 1号土坑・単独埋甕
図版5 土器
図版6 土器

図版7 土製円盤 土偶 旧石器時代石器（尖頭器・細石刃核・細石刃）
図版8 打製石斧 磨製石斧 磨石
図版9 凹石 特殊石器
図版10 石皿 多孔石 石棒 石鎌・ドリル・尖頭器状・二次加工削片
図版11 石匙 スクレイパー 石鍤

# 目 次

## 第Ⅰ章 調査概況

第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査組織.....	1
第3節 調査区域の設定と調査方法.....	1

## 第Ⅱ章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置.....	2
第2節 遺跡の地理的歴史的環境.....	2

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 概 情.....	3
第2節 旧石器時代の遺物.....	4
第3節 縄文時代の遺構と遺物.....	5
第4節 土 器.....	19
第5節 土製品.....	19
第6節 石 器.....	19

## 第Ⅳ章 まとめ

第1節 遺構の変遷について.....	56
第2節 井戸尻III式期の住居型式について.....	56
第3節 土器（76・94）について.....	58
第4節 遺構別石器組成について.....	58

# 第Ⅰ章 調査概況

## 第1節 調査に至る経緯

- 昭和57年 5月25日 文化庁に発掘通知を提出する。  
5月31日～6月5日 調査対象域の試掘を行う。  
7月19日 発掘調査を開始する。  
9月14日 発掘調査を終了する。

## 第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 坂本美夫 長沢宏昌（県文化財主事）

作業員 渡辺とく枝 丸山かね子 丸山善子 丸山はつえ 丸山ひろじ 丸山まさ子 丸山ふみ江 渡辺  
みさを 渡辺ひさ枝 丸山 保 小池マサエ 渡辺光男 小池寿子 渡辺俊也 望月孝男 伊藤  
克志 望月 徹 小野正人 丸山 修 丸山章仁 小池秀岳 鶴田良美 板本穂波 丸山孝子  
古屋泰美 守屋真里 広瀬千恵美 渡辺 薫 羽中田恵子 飯室幸子 石田文次郎 土肥正治  
弦間千鶴 若尾澄子 寺本由美子 小笠原睦子

整理作業員 長田久江 清水真弓

調査協力 市川大門町教育委員会

## 第3節 調査区域の設定と調査方法

今回の調査は、山梨県警察本部のヘリポート建設に伴う事前調査として行われた。ヘリポート建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、掘削・盛土の対象域が4,000m<sup>2</sup>ほどと広く、本調査に先立ち数カ所にトレントチを設定して試掘調査を行い、本調査必要部分の絞り込みを行った。その結果建設予定地北東寄り部分に遺物の集中が確認され、1,800m<sup>2</sup>を本調査の対象とした（第2図=全体図）。

調査はヘリポートセンター杭を基準とし、杭に対しN-45°-Eを基準ラインとした。調査区域は4 mグリッドを設定することとし、基準ラインに沿ってA～I、それに直交する軸に0～25を番付けした。

## 第Ⅱ章 遺跡概要

### 第1節 遺跡の位置

宮の前遺跡は西八代郡市川大門町黒沢宮の前6446番地に所在する。

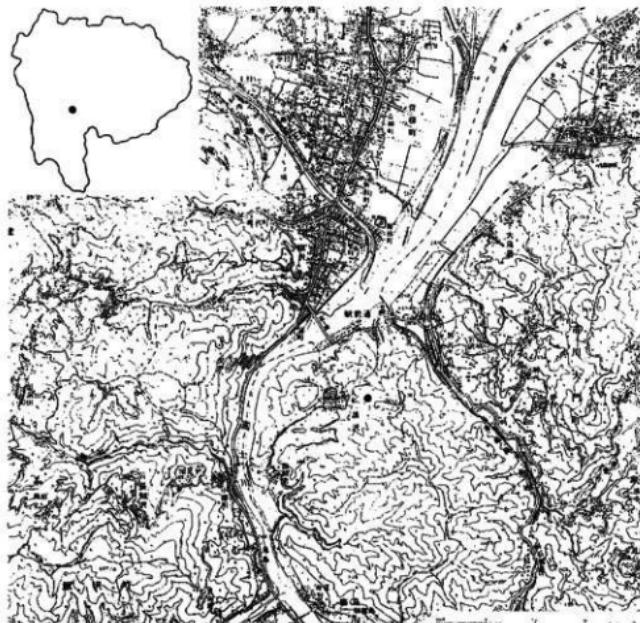
### 第2節 遺跡の地理的歴史的環境

本遺跡の所在する市川大門町は、甲府盆地南端に位置し、盆地を南流する釜無川と西流する笛吹川とが合流する地点である。遺跡は、富士川左岸の西北西方向に張り出した舌状台地先端部に立地し、標高約370mを計る。遺跡立地地点は緩く北側に傾斜しており、眼下に富士川が南流し、両岸に市街地が形成されている状況が一望される。これらの展望は、遺跡地からは両サイドから尾根が延びており視界が限られるが、富士川の上流かなたには八ヶ岳が展望される。なお、遺跡と現在の富士川との比高は130mほどである。

遺跡の所在地に近接して、遺跡名となった神明社が存在し、本遺跡出土と思われる石棒が祀られている。本遺跡は以前炉跡が確認されたことがあったとのことである。また、この遺跡は以前から甲府営林署の育苗畠として利用されており、耕作中にも復元可能な土器がまとまって出土したことがあったという。さらに打製石斧や土器の大破片などの出土もあり、縄文時代の遺跡であることは認識されていたが、これまで発掘調査が行われたことはなく、規模・内容等については不明なままであった。

以上のように、黒沢地区は富士川左岸の台地上に位置するが、全体的な傾斜は大きく東から西方向と認識でき、そこに多くの尾根が発達している。尾根と尾根の間の谷部もそれほど深いものではなく、平坦なテラスが発達した状況と言うことができ、大木台地全体としてみた場合遺跡の立地条件に恵まれたエリアと言える。

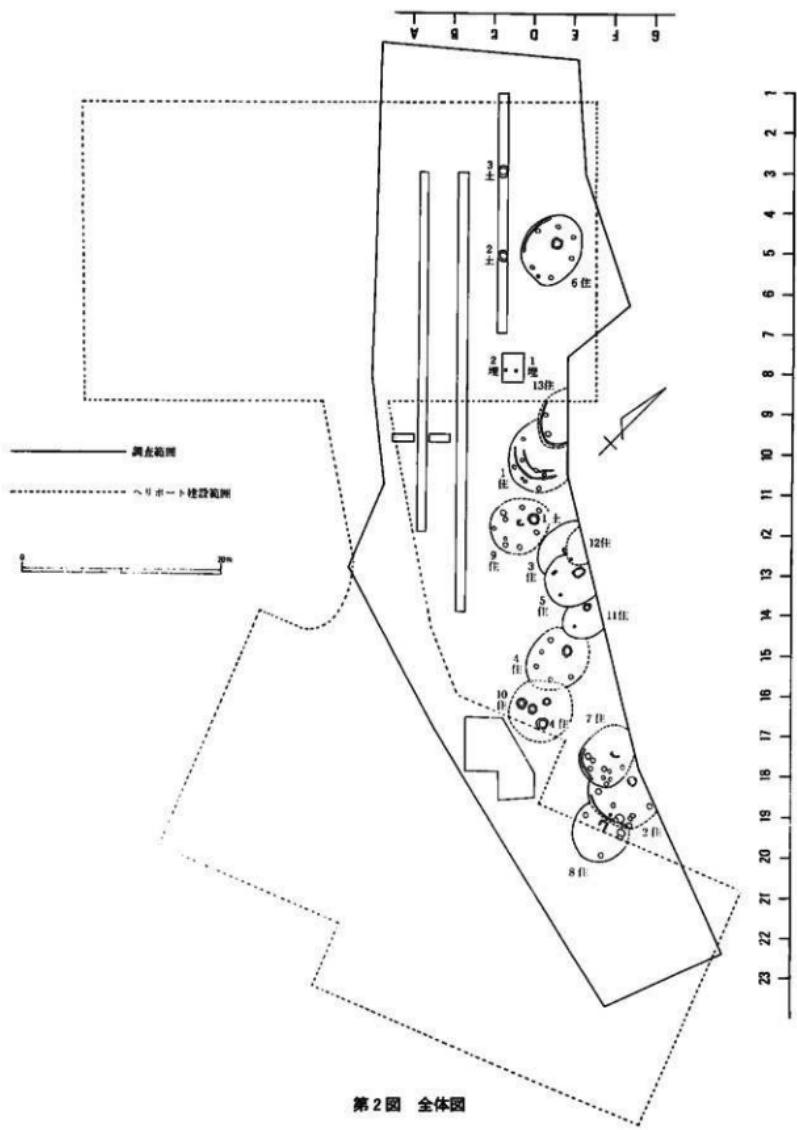
これまでこの地域で確認された遺跡は本遺跡のほか、西南西約200mに寺の前遺跡、さらにそこから300mに家の前遺跡（いずれも縄文時代中期）があり、これらはほぼ直線上に並んでいる。今までのところ確認された遺跡はこの3遺跡のみであるが、前述したように台地全体に同様の地形が見られることから、詳細な分布調査が行われればさらに多くの遺跡が確認されよう。



第1図 遺跡位置図

## 第III章 遺構と遺物

### 第1節 概　況

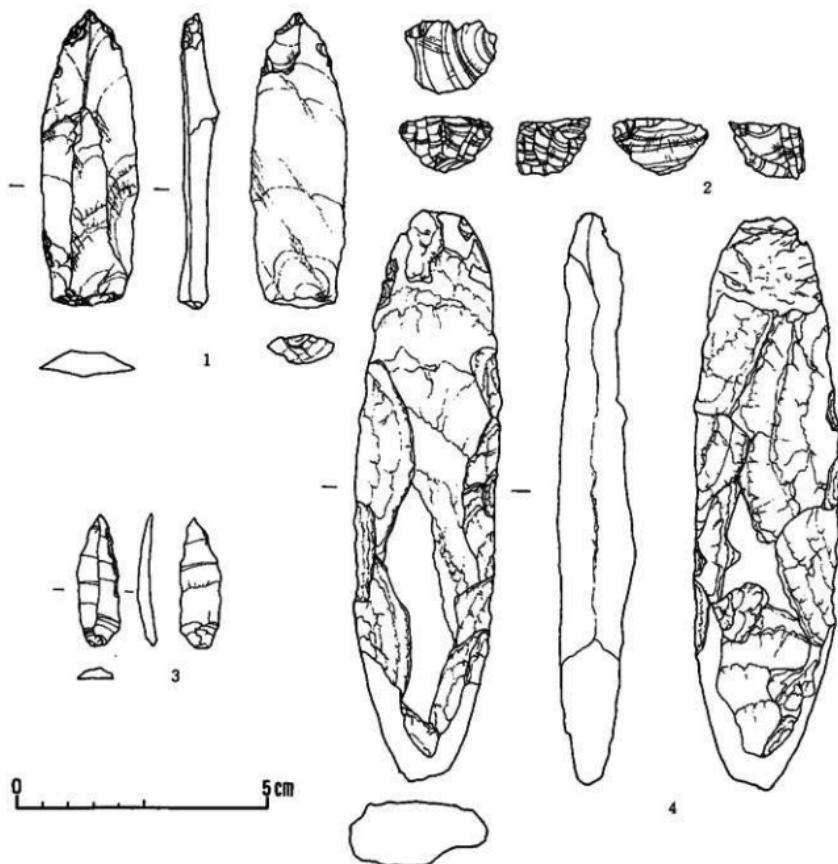


第2図 全体図

前述したように、ヘリポート建設予定地内で行った事前の試掘調査により、本調査の対象を2,000m<sup>2</sup>に絞り込み、全面で遺構確認を行ったが、調査面積1,800m<sup>2</sup>のうちの500m<sup>2</sup>ほどに遺構が集中しており、この状況からも傾斜に沿ってさらに調査区域外に集落が展開していることは確実である。等高線に沿って尾根を取り巻くように集落が存在する可能性も充分考えられる。

調査の結果、13軒の住居跡と6基の土坑及び2基の単独埋甕が確認された。これらはすべて縄文時代中期の井戸尻Ⅲ式期～曾利Ⅳ式期に位置付けられるもので、それ以外の時期の遺構は全くなく、集落の営まれた時期が極めて限定されている。なお、遺構は確認されていないものの、旧石器時代の石器数点が出土しており当該時期の居住の痕跡が確認された。

## 第2節 旧石器時代の遺物



第3図 旧石器時代石器

本調査において旧石器時代に属する遺構・遺物の確認のため6個所に試掘坑を設定したところ、黒曜石製の剥片4点と水晶製残核1点、縄文時代の遺構から彫刻刀型石器1点・細石刃石核の打面再生剥片1点・細石刃1点・尖頭器1点の計8点が確認されている。図示したものは、この内の4点である。なお、遺構については確認されていない。

1は、縦長剥片の石刃を素材としたシルト岩製の彫刻刀型石器である。素材となる石刃は、背面・腹面ともに同一方向からの加筆による剥離面で構成される。のことから、単設打面の石核からの剥離が想定できる。素材背面先端左に打面を形成、そこから先端右側縁に沿うよう腹面に彫刻刃面を作出している。彫刻刃面は1面のみ。背面には、微細な剥離が部分的に観察される。腹面には、剥離痕は観察されない。

2は、黒曜石製で、正面図及び右側面図にみえる同一方向で複数の縦長剥離痕の存在から細石刃核であるとまず判断した。縦長の剥離面と打面の切り合い関係を検討すると、打面は上面図右からの剥離作業で形成され、この作業に伴い縦長の剥離面の打痕は全て消失する。更に、裏面図に見られる剥離面の存在と打面と剥離面の角度が100°に達し、これをもって作業を終了している。のことから、細石刃核の打面再生剥片とした。

3は、凝灰岩製で、ここでは細石刃に分類してある。背面の左縁辺には微細な剥離が存在するのに対し、右側縁は粗雑な剥離が観察される。

4は、粘板岩製で両面加工の尖頭器である。出土状況からみて時期判断は非常に難しいがここに掲載する。

### 第3節 縄文時代の遺構と遺物

#### ○ 1号・13号住居跡

(位置) D-9・10, E-9・10グリッド。

(形状・規模) 1号住居跡はおよそ半分の調査である。梢円形を呈するものと思われ、確認部分での短軸で7mちかい大型の住居跡である。本住居跡には周溝が存在するが、50cm離れて同心円状に確認されている。1回の建て替えが想定される。拡張が行われたのであろうが、埋甕のピットの位置からすると拡張前の住居の壁はおおむね拡張後の周溝の位置にあったものと思われる。13号住居跡はごく一部を調査したにすぎない。これも梢円形を呈するものと思われ、6~7mの規模と推定される。

(柱穴) 柱穴は住居跡の前半分についてのみ確認できるが、拡張の前も後もいずれも周溝部分に掘り込んでいる。拡張前は2と3、4と5がそれぞれ対応するものと考えられる。拡張後では7と8が対応するのであろう。直径40cm~50cm、深さ50cm程度である。13号住居跡も周溝が存在するが、9が確実な柱穴と思われ、やはり周溝部に掘り込まれる。

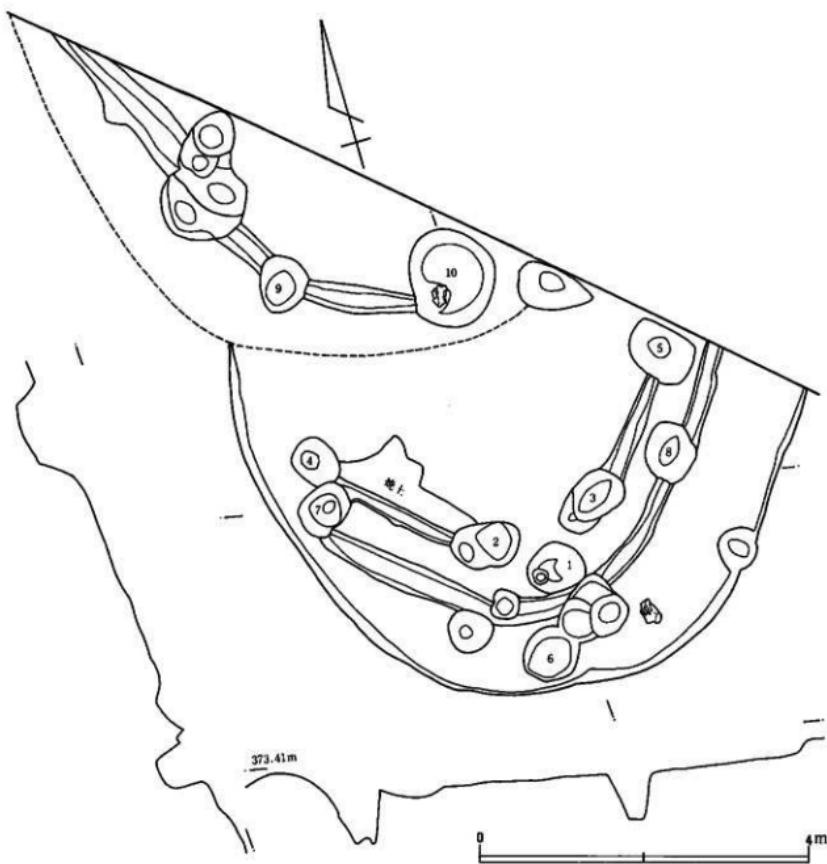
(埋甕) ピット1と6はそれぞれ埋甕のピットと考えられる。住居廃絶段階で抜かれたものかあるいは最初から存在しなかったのか、いずれにしても土器は出土していない。10は位置的には埋甕ピットの可能性があるが、掘り方が大きすぎるのが気にかかる。これも土器は出土していない。

(遺物) 13号住居跡からは覆土中からごくわずかな土器破片が出土しただけであり、図示しなかった。1号住居跡からは、土器のはか打製石斧をはじめ数種類の石器が出土している。土器(第1図1)は覆土からの出土である。時期不明。石器では、打製石斧(第37図1~3)が出土している。本遺跡は後述するように、打製石斧が非常に多く確認されているが、本住居跡の3点はほぼ標準的な大きさである。この他、凹石(第51図1)、多孔石(第55図1)、石匙(第57図1)が出土している。

#### ○ 2号住居跡

(位置) G-18・19グリッド。

(形状・規模) これも半分ほどの調査であるが、さらに7号住居跡に切られており全体の規模は判りにくい状況となっている。調査部分から推定すると直径7mの円形を呈するものと思われる。



第4図 1号・13号住居跡

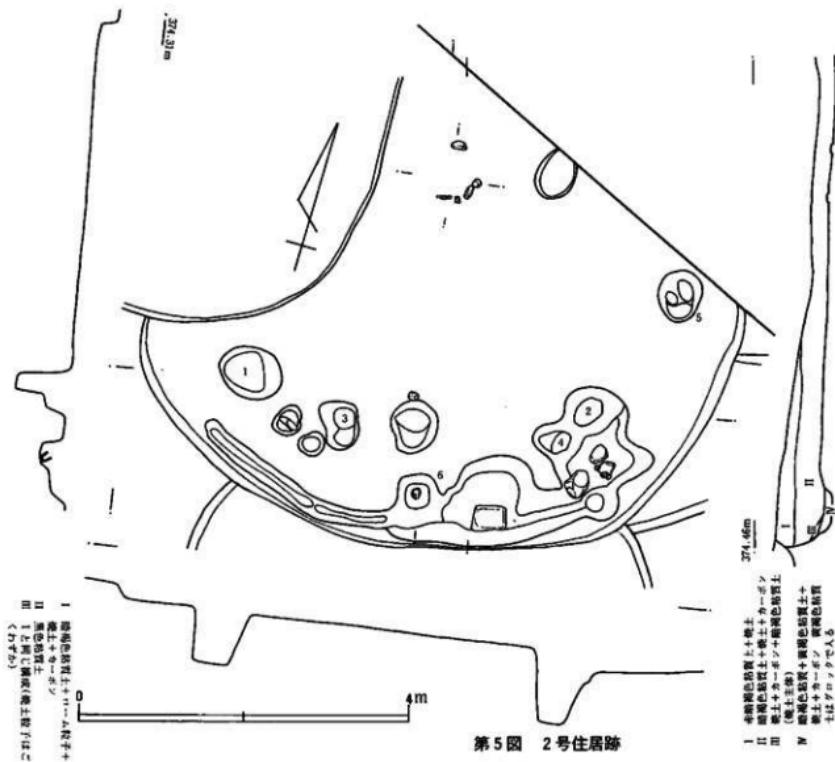
(炉) ほぼ中央に石囲炉が確認されている。70cm×100cmの楕円形の掘り込みに拳大～手のひら大の砾を配した石囲炉であるが、この時期の炉にしては炉石が小さい。砾は部分的に残っているだけである。掘り込みの深さは15cmを計る。

(柱穴) 50cm～70cm大のビットが確認されているが、位置関係などから1と2、3と4が対応するものと考えられる。また、5も柱穴であろう。いずれも、床面からの深さ60cmほどを計る。

(周溝) 入り口部付近に、一部であるが周溝が確認された。幅20cm、深さ10cmを計る。

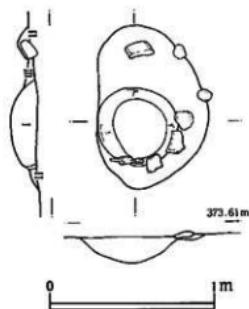
(埋甕) 入り口部に深さ20cmの掘り込みが確認されており、内部から口縁部欠損の土器1点が正位で出土している。

(遺物) 本住居跡からは、土器、土製品、石器が出土している。土器は5点を図示した(第25図2～6)2は埋甕である。3～6はいずれも覆土からの出土である。土製品は土製円盤(第36図1)が出土している。石器は打製石斧(第37図4～13)、磨製石斧(第46図1・2)、凹石(第51図2～6)、石匙(第57図2)、石鎌(第56図)



第5図 2号住居跡

2)、石錐（第59図1）、二次加工剝片（第56図12）などが出土している。



第6図 2号住居跡炉

#### ○ 3号・5号・12号住居跡

（位置）E-12、F-12・13グリッド。

（形状・規模）これらの住居跡が確認されている部分は、5軒の住居跡が重複しており、形状・規模がはっきりするものは少ない。

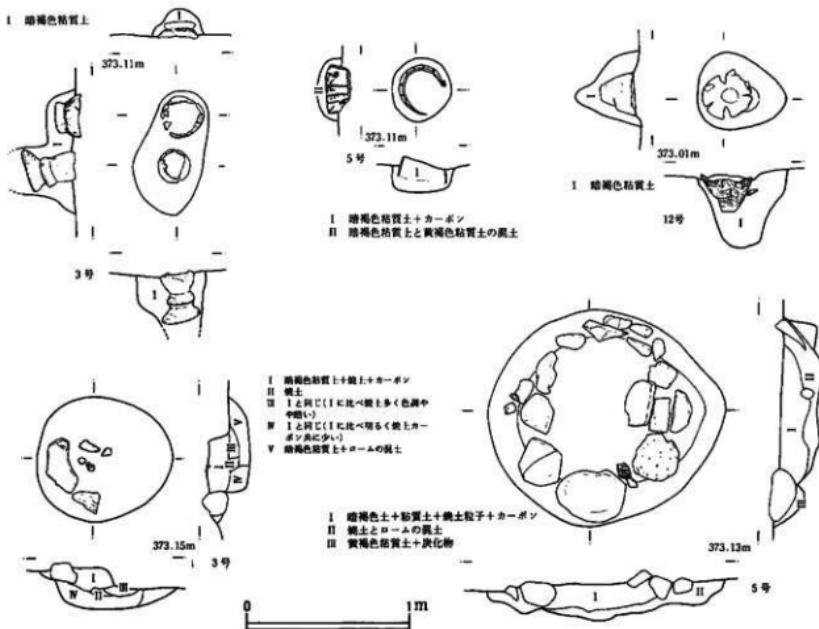
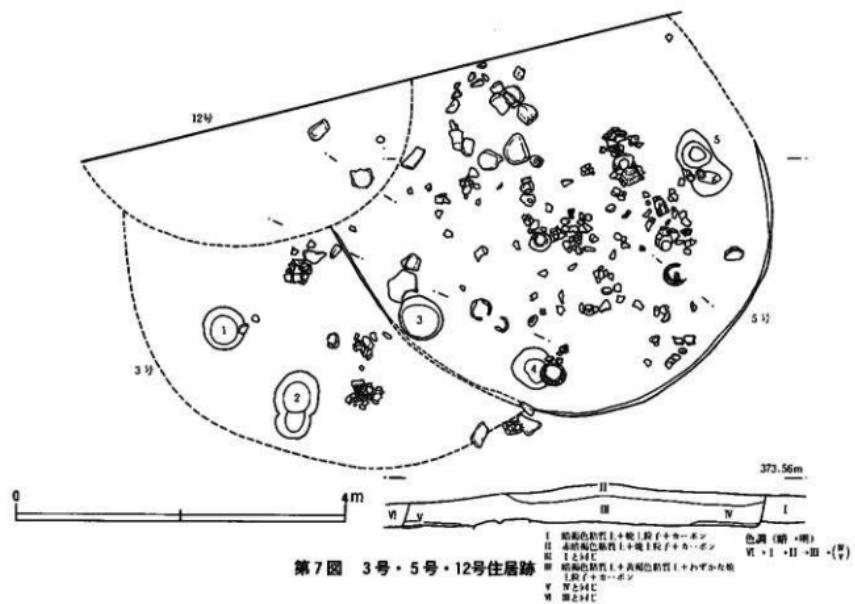
3号住居跡は5号・12号住居跡に切られ、一部が残っているだけであるが、5号住居跡内に3号住居跡のものと思われる埋甕が確認されていることでおよその規模が判る。埋甕まで含めると梢円形で長径6m、短径5m程度と推定される。

5号住居跡は一部が未調査であるが、やはり長径6m、短径5m程度である。

12号住居跡はごく一部だけの調査であるが3号、5号住居跡に比べやや小振りである。

（炉）3号住居跡は直径70cm、深さ20cm程の円形の掘り込みをもち、一部残存する炉石は約40cmを計る。

5号住居跡は、炉石も全て残っており、掘り込みもしっかりしている。掘り込みは130cm×140cm、深さ20cmで、拳大～人頭大の礫を梢円形に配している。最も大きな礫が入り口部方向を向き、住居主軸上に位置する。なお、



第8図 3号・5号・12号住居跡埋蔵・炉

炉石には多孔石が含まれている。

12号住居跡では、炉は確認されていない。

(柱穴) 3号住居跡では2基の柱穴1・2が確認されているが、それぞれ対応すべき柱穴は未確認である。5号住居跡では、埋甕を中心にして4と5が対応し、3も柱穴と考えられる。いずれも深さ60cm～70cmを計る。

(埋甕) 3号住居跡の埋甕は2基確認されているが、土器は3個体の出土である。第8図左上に示した散細図のとおり、2基の埋甕は住居跡の主軸上に直線に並んでいる。炉石側埋甕は逆位で胸部下半を欠損している。壁側埋甕は2個体の土器を入れ子状に埋設したものである。このような屋内埋甕の出土状況はほとんど類例がないものと思われる。これも2個体ともに正位で胸部下半は欠損している。なお、2基の埋甕の前後関係ははっきりしない。

5号住居跡埋甕は正位で口縁部及び胸下半を欠損している。掘り方は極めて小さく、埋設土器ギリギリとなっている。

12号住居跡埋甕も正位で、胸上半部及び底部を欠損している。直径50cm、深さ40cmの掘り方である。

(遺物) これらの住居跡からは多くの遺物が出土した。ほとんどの遺物は覆土中からの出土である。

3号住居跡の土器(第25図7～16)のうち7～9の埋甕以外は全て覆土である。石器は少なく、打製石斧(第37・38図14～18)、磨製石斧(第46図3)が出土しているだけである。

5号住居跡からの遺物は非常に多い。土器(第26・27図25～40)は25の埋甕および26・28・29・30・36・37などが床面直上である。土製品では土偶(第35図4)、土製円盤(第36図8～11)がある。石器の種類も多く、打製石斧(第28・29図43～54)、磨製石斧(第46図6・7)、磨石(第49・50図2～5・22)、石皿(第48図3)、凹石(第51・52図12～14)、多孔石(第55図3～7)、スクレイパー(第58図3)などが出土している。

12号住居跡は遺物が少ない。土器(第31図75・76)2点のうち、75は埋甕である。石器には打製石斧(第41図74)、凹石(第52図24)、石棒(第60図)があるが、凹石と石棒は床面直上の出土である。

#### ○ 4号住居跡

(位置) E-14・15、F-14・15グリッド。

(形状・規模) 奥壁部分の一部を11号住居跡に切られるが、長楕円形を呈し、長径7.2m、短径5.5mを計る。

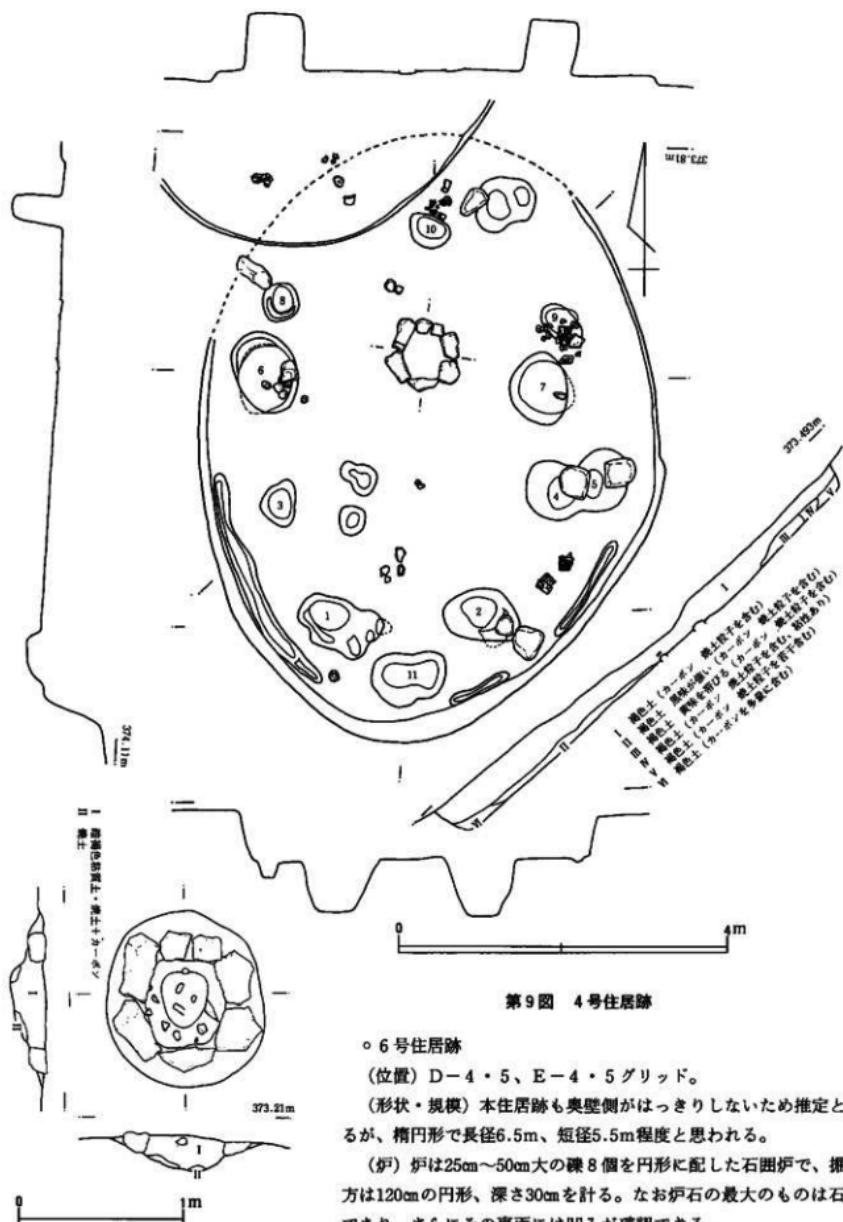
(炉) 中央部やや奥に石圓炉が存在する。20cm～40cm大の石7個を、内側が四角になるように配している。住居の主軸を多分に意識した配し方で、入り口部側には三角形状の平石を先端が入り口を向くようにし、また、奥壁側には20cm大の石2個を置いている。掘り方は100cm×90cm、深さ20cmを計る。

(柱穴) 本住居跡では柱穴が非常に規則的な対応状況を示して確認されている。1と2、3と4または5、6と7、8と9がそれぞれ対応し、最奥部に10が存在する。大きさは径50cm～60cm、深さ40cm～60cmにおさまるもののがほとんどであるが、6と7は他に比べ大きく、径100cm程度となっている。また、この2基は、それ程8・9と極めて近接しており、何らかの関連的施設であるのかもしれない。このことから本住居跡は7ないし9本柱穴と考えられる。

(周溝) 本住居跡にも一部ではあるが周溝が確認されている。住居跡出入り口側にのみ確認され、幅20cm～30cm、深さ10cm程度である。

(埋甕) 本住居跡では埋甕そのものは出土していないが、入り口部分に深さ20cmのピット11があり、埋甕のピットと考えられる。ただし、深さは浅い部分で15cm程度で、口縁部や底部等を欠損したもの以外は想定しにくい。

(遺物) 土器(第26図17～24)のうち、17・18・21は床面直上から出土した。土製品も多い。土偶(第35図1～3)、本遺跡唯一の土鉢(第35図7)、土製円盤(第36図2～7)などが出土している。石器には、打製石斧(第26～28図19～42)、磨製石斧(第46図4・5)、磨石(第49・50図1・18・21)、石皿(第48図1・2)、凹石(第51図7～11)、多孔石(第55図2)、石匙(第57図3～10)、スクレイパー(第58図1)、二次加工剝片(第56図13)などがある。



第9図 4号住居跡

○ 6号住居跡

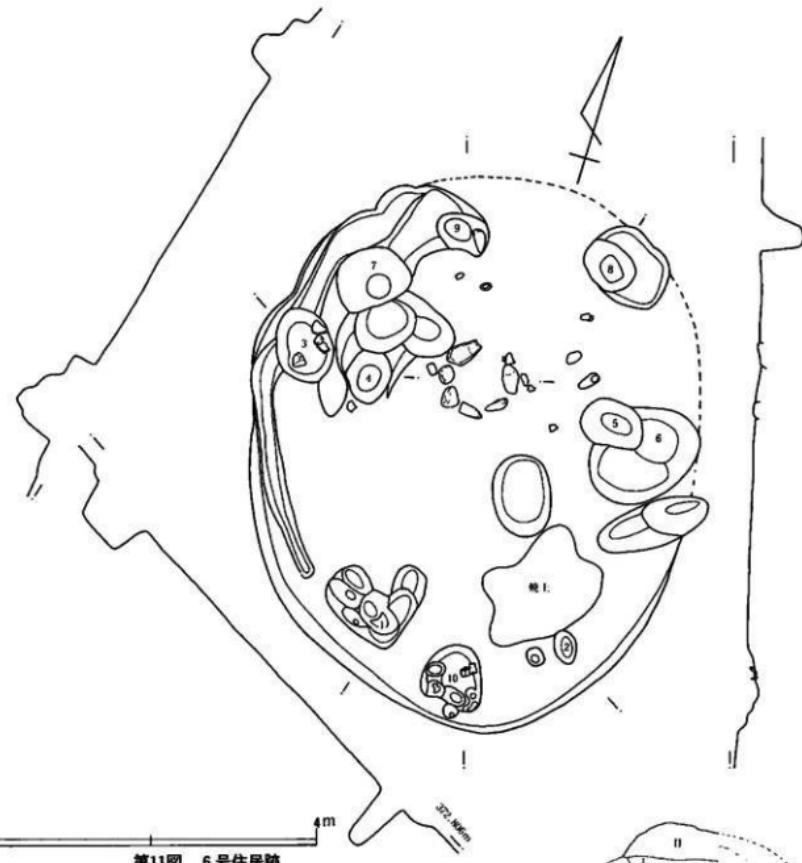
(位置) D-4・5、E-4・5 グリッド。

(形状・規模) 本住居跡も奥壁側がはっきりしないため推定となるが、梢円形で長径6.5m、短径5.5m程度と思われる。

(炉) 炉は25cm~50cm大の砾8個を円形に配した石圓炉で、掘り方は120cmの円形、深さ30cmを計る。なお炉石の最大のものは石皿であり、さらにその裏面には凹みが確認できる。

(柱穴) 本住居跡の柱穴の配置は、4号住居跡のそれに類似するが、小ピットの掘り込みが多いために4号住居跡ほど対応関係が明

第10図 4号住居跡炉



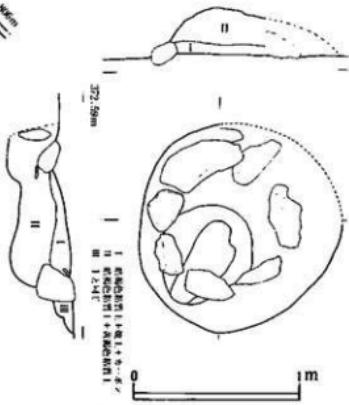
### 第11図 6号住居跡

瞭ではない。1と2、3または4と5または6、7と8、さらに奥壁沿いの9が想定されるが、埋甕と炉を結ぶ主軸に対し線対称とは言えない状況である。また、直径は40cm~80cm、深さも30cm~80cmとばらつきがある。

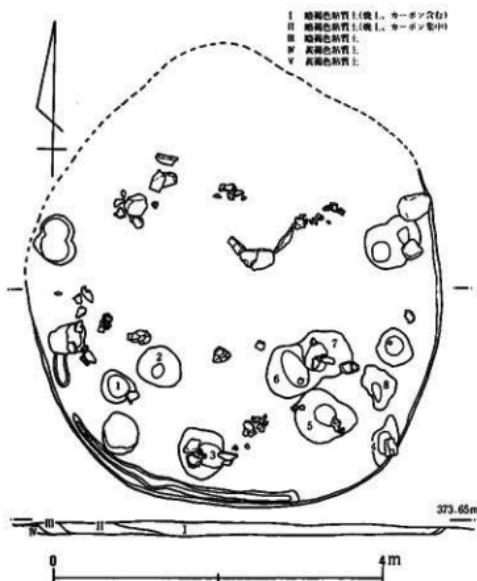
(周溝) 本住居跡も一部に存在する。西壁沿いに確認でき、やはり幅20cm、深さ10cm程度である。

(埋甕) 埋甕ピットは直径70cmを計るが、深さ15cmと浅い。この深さでは土器埋設の高さを確保しにくいと考えられるが、埋甕自体も深鉢の胴下半部が斜めに埋設されており、通常の埋設状況とは異なる。

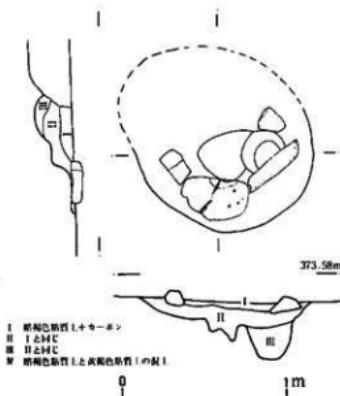
(遺物) 土器(第28図41~44)のうち、41は埋甕、44は床面直上からの出土。土製品では土器片錘(第35図8)、土製



第12图 6号住居跡



第13図 7号住居跡



第14図 7号住居跡

円盤（第36図12）が、石器では打製石斧（第40図55・56）、磨石（第49図6・7）、石皿（第48図4）、凹石（第52図15）、石錐（第56図9）、尖頭器状先端部（第56図10）などが出土。

#### ○ 7号住居跡

（位置）F-17・18、G-17・18グリッド。

（形状・規模）住居跡の北側半分は攪乱を受けているが、梢円形を呈するものと思われる。短径は5mである。（炉）炉も攪乱を受けているため半分だけの調査である。石囲炉であるが、炉石は3個だけ残存する。この炉も入り口部方向を意識して最も大きな石を配している。この石は石皿としても使用されている。なお、掘り方は約100cmの円形である。

（柱穴）本住居跡には埋甕あるいはその掘り方と思われるピットが確認されておらず、また住居跡そのものも半分攪乱を受けている状況から、主軸がはっきりしない。図中に番号を付した1～10のピットは、最も深い3が40cm、他はいずれも50cm以上の深さで、すべてに柱穴の可能性がある。あえて言えば1と8、2と7に対応性が見られるが、この他ははっきりしない。

（周溝）本住居跡でも一部に周溝が確認されている。入り口部から西壁にかけての一部で、幅10cm、深さ5cmである。

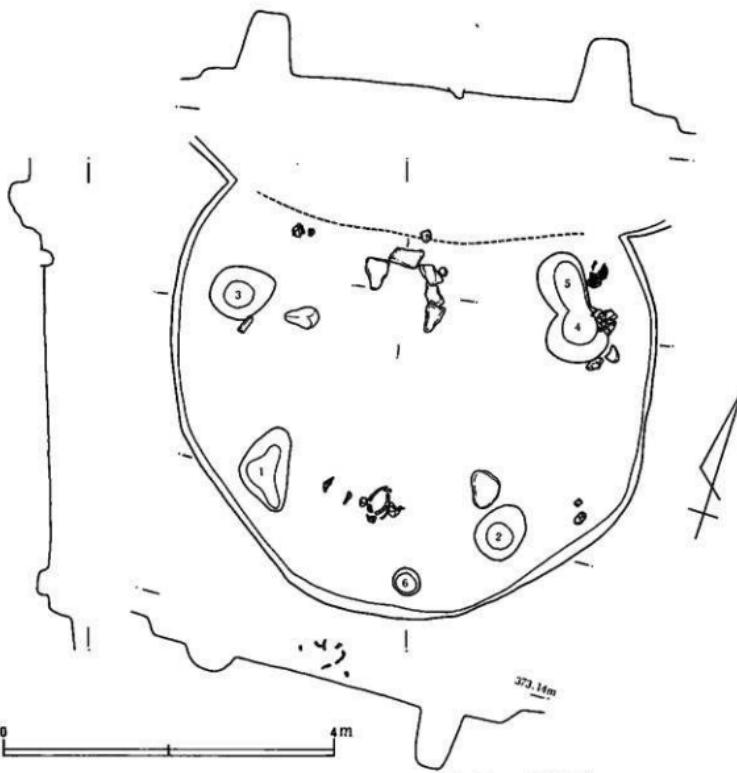
（遺物）本住居跡の遺物は多くはない。土器（第28図45～49）のうち、45・47・49は床面直上からの出土である。石器では打製石斧（第29図57～61）、磨製石斧（第46図8）、石皿（第48図5）、多孔石（第55図8・9）、石錐（第56図3）、石錘（第59図2）などがある。

#### ○ 8号住居跡

（位置）F-18・19・20、G-19グリッド。

（形状・規模）奥壁部分を2号住居跡に切られているが、梢円形を呈しており、長径6m、短径5.8mと推定される。

（炉）一部の炉石が引き抜かれているが、30cm～50cm大の大型の炉石を用いてしっかりと構築されている。住



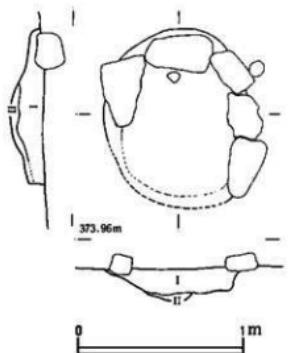
第15図 8号住居跡

居の主軸に沿って長方形に炉石を配している。炉内部には $80\text{cm} \times 50\text{cm}$ ほどの空間が保たれたと考えられ、今回、調査された住居跡のうち最大の炉である。なお、掘り方は意外に小さく、 $110\text{cm} \times 80\text{cm} \times 2\text{cm}$ である。

(柱穴) 6基のビットが確認されている。位置からは1と2、3と4または5が対応することになるが、1は深さ20cmと浅い。他は70cm~80cmを計る。

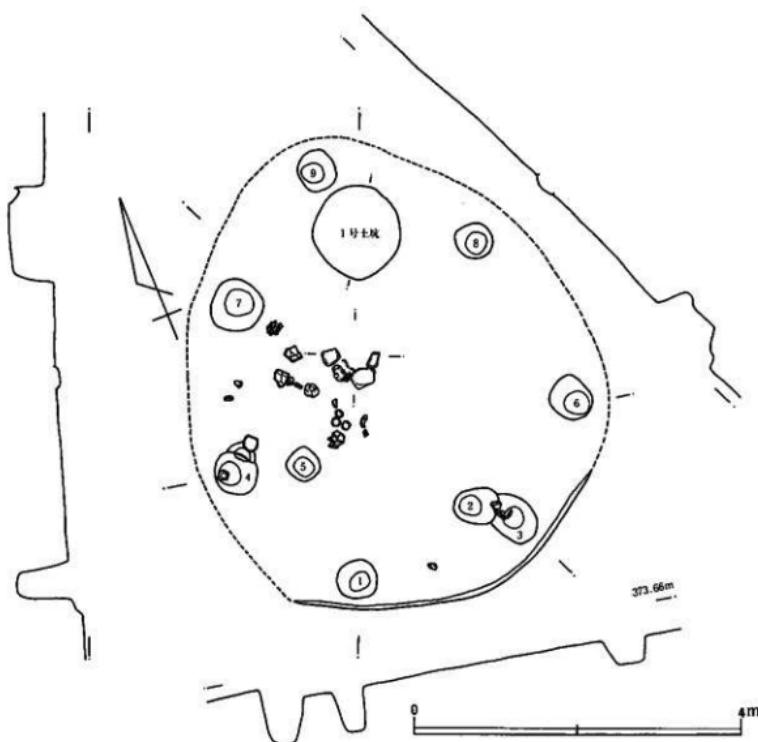
(埋甕) 本住居跡からは埋甕は出土していないが、ビット6は深さ15cmと浅く、位置からも埋甕ビットと考えられる。

(遺物) 土器（第29図50~58）は全て覆土からの出土である。土製品では土製円盤（第36図13・14）が出土している。石器は打製石斧（第40・41図62~65）、磨石（第49図8）、凹石（第52図16~18）、さらに凹み部分が異常に大きく、しかも多面を同様に使用した特異な状態の凹石（第54図2・3）、石匙（第57図11）などがある。



I 普通色粘質土+焼土  
II Iと同じ(1と比べ焼土多)

第16図 8号住居跡炉



第17図 9号住居跡

○ 9号住居跡

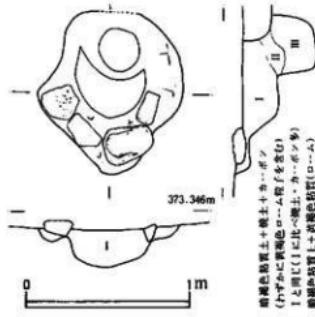
(位置) D-11・12グリッド。

(形状・規模) 本住居跡では、壁がごく一部で確認されているだけであり、形状ははっきりしない。規模も不明であるが、柱穴の位置から6m程度と推定される。

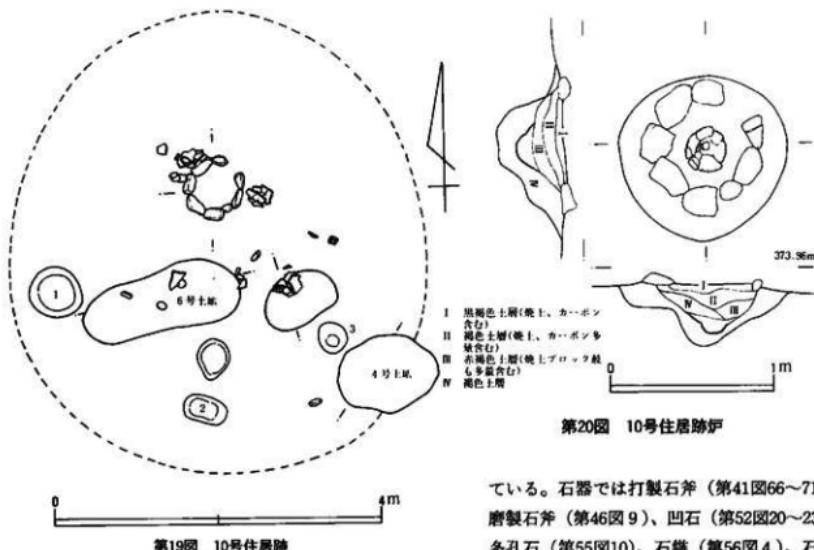
(炉) 石圓炉であるが炉石は4個残されているだけである。残存する炉石には大きさに差がある。本遺跡の他の住居跡の状況からすれば、最大の炉石を入り口部に向いているケースが多く、本住居跡も同様であろう。なお、炉石の一つには多孔孔を用いている。

(柱穴) 本住居跡ではピット9基が確認されているが、深さの差が大きく、2・3・6・8が25cm~40cm以内で、他は50cm以上となっている。このような深さの差を無視して、炉石の配置状況から位置関係をみていくと、1と2または3、4と6、7と8、奥壁沿いの9となり、この状況からは7本柱と考えるのが妥当であろう。5は4と関連するものであるかもしれない。

(遺物) 土器（第29図58~62）は全て床面直上からの出土である。土製品では土器片錐（第35図9）が出土し



第18図 9号住居跡跡炉



第20図 10号住居跡

ている。石器では打製石斧（第41図66～71）、磨製石斧（第46図9）、凹石（第52図20～23）、多孔石（第55図10）、石鏃（第56図4）、石匙（第57図12・13）、石錐（第59図3・4）などが出土している。

#### ○ 10号住居跡

（位置）E-16グリッド。

（形状・規模）本住居跡では壁が全く確認されておらず、周溝、埋甕等も存在しないため、形状・規模とも不明である。

（炉）炉は非常にしっかりした造りで、比較的小型の礫を円形に配した石囲埋甕炉である。石囲埋甕炉は今回の調査では唯一の確認である。炉石は他の住居跡で見られるような大小の差もなく、ほとんど同じ大きさであるため、住居の主軸がつかめない。掘り方は直径100cm、深さ40cmを計る。炉内部最下部に土器底部を埋置したもので、通常の石囲埋甕炉のように土器と炉石が接するかたちとは異なる。

（柱穴）住居の主軸が不明ではっきりしないが、3基の小ビットが確認されており、位置からは1と3が対応する可能性が強い。1は30cm、3は50cmの深さである。

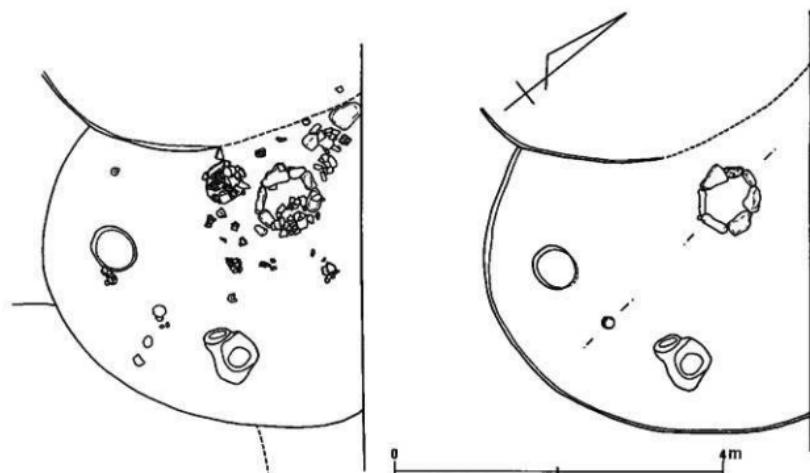
（埋甕）上記の柱穴位置を想定すると、2が埋甕ビットになる可能性が強い。深さ25cmである。

（遺物）土器（第30図63～68）では63が炉体土器で、他は64・68以外全て床面直上である。土製品では土製円盤（第36図15）が出土している。石器では打製石斧（第41図72）、磨製石斧（第46図10・11）、磨石（第50図19）、多孔石（第55図11）、石鏃（第56図5～7）などが出土しており、さらに特殊石器としておいたペンダント風の石製品（第54図1）がある。

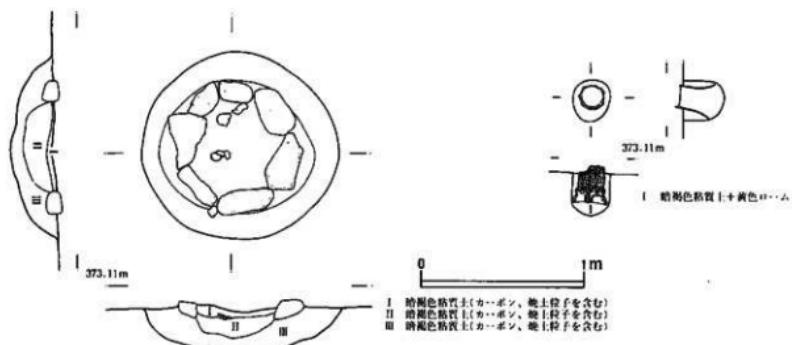
#### ○ 11号住居跡

（位置）E-13・14、F-13・14グリッド。

（形状・規模）本住居跡はおよそ半分の調査で、しかも5号住居跡に切られているため規模ははっきりしないが、円ないし梢円形を呈し、直径6m以下程度と推定される。



第21図 11号住居跡



第22図 11号住居跡埋甕・炉

(炉) 炉は20cm～40cm大の竈7個を円形に配した石囲炉で、主軸とはややズレるもの、枕石状の細長い河原石2個を入り口部に配している。また、炉石の一つには石皿を用いている。なお、掘り方は径120cm、深さ30cmを計る。

(柱穴) ピットは2基確認されているだけであるが、埋甕を中心に対称位置にあり柱穴と考えられる。ともに径50cm、深さ50cmを計る。なお、右側柱穴には補助的な浅いピットが確認されている。

(埋甕) 脚下半部を欠損した深鉢を、逆位に埋置したものである。掘り方は極めて小さく、土器ギリギリの大きさになっている。

(遺物) 土器(第30・31図69～74)は埋甕で、他は床面直上である。石器は少なく、打製石斧(第41図73)、磨石(第50図20)、石皿(第48図6)が出土している。

◦ 1号土坑

(位置) D-11グリッド。9号住居跡内に確認された。

(形状・規模) 直径110cmの円形を呈し、深さ50cmを計る。壁は緩く立ち上がる。

(遺物) 本土坑からは底面に接して、土器（第32図77）及び磨製石斧（第47図12）が出土している。この他にも磨石様の円礫や石皿風の礫が出土しているが、明瞭な使用の痕跡が認められないため図示していない。

◦ 2号土坑

(位置) D-8グリッド。

(形状・規模) 直径80cmの不正円形を呈し、深さ60cmを計る。壁の立ち上がりはきつく、垂直にちかい。

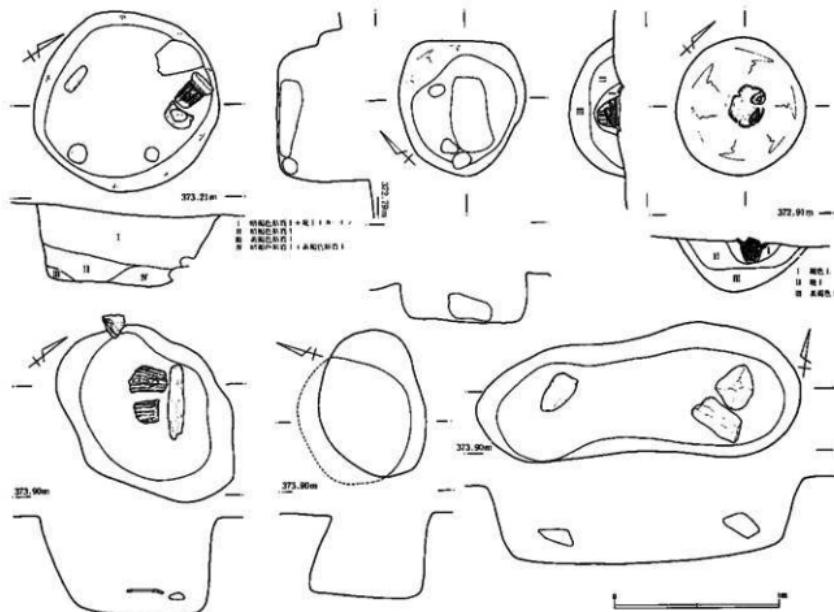
(遺物) 土器（第32図78～80）及び打製石斧（第41図75・76）はいずれも覆土で、磨石（第49図9・10）、凹石（第53図25・26）のうち10と26は床面直上である。また、石皿（第48図7）も床直である。

◦ 3号土坑

(位置) D-4グリッド。

(形状・規模) 直径80cm、深さ35cmの掘り方で、壁の立ち上がりは緩い。本土坑は土坑掘り込み後、黄褐色土を入れ、さらにその上部に焼土を充填し、そこに完形土器を埋置したものである。土器は口縁部の一部が失われているが、意識して欠損したものとは思われず、胴部や底部に穿孔もみられない。

(遺物) 完形土器（第32図81）1点が出土している。



第23図 1号～6号土坑

○ 4号土坑

(位置) E-17グリッド。

(形状・規模) 長椭円形を呈し、長径130cm、短径90cm、深さ60cmを計る。壁の立ち上がりはきつい。

(遺物) 床面より浮いた状態で、土器（第32図82）と石材が出土している。なお、土器は破片3点が出土しており、いずれも同一個体であった。

○ 5号土坑

(位置) E-16グリッド。

(形状・規模) 楕円形を呈し、長径90cm、短径60cm、深さ50cmを計る。本遺跡唯一の袋状土坑である。

(遺物) 覆土から打製石斧（第41図77）、石匙（第57図14）各1点が出土した。

○ 6号土坑

(位置) D-16グリッド。

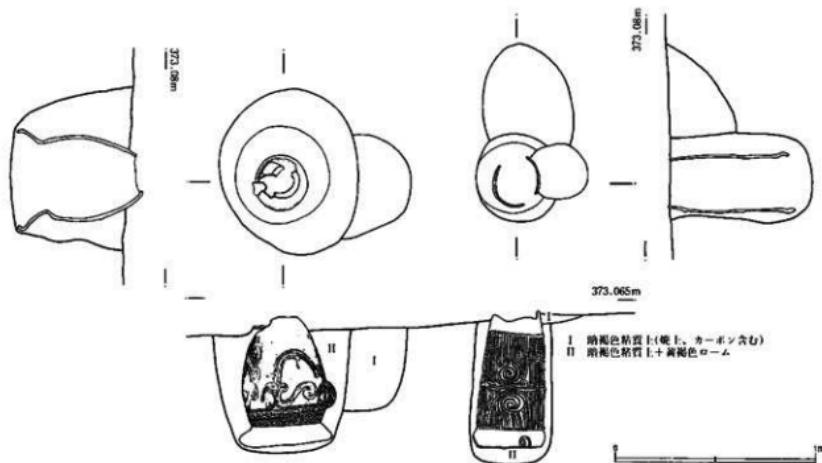
(形状・規模) 長椭円形を呈し、長径185cm、短径75cm、深さ50cmを計る。壁の立ち上がりは緩い。

(遺物) 覆土中から打製石斧（第41図78～80）3点が出土しているが、これと別に床面からやや浮いて30cm大の石3点が出土した。

○ 1号・2号単独埋甕

(位置) D-7グリッド。

(出土状況) 2基の単独埋甕は極めて近接して埋置されており、掘り方の距離は約60cmである。1号は胴張りの深鉢を逆位に埋設している。掘り方は確認面から70cmを計るが、これは口縁部の最大径とほぼ同じである。土器（第34図99）は底部近くに径2cmの穿孔がある。底部は一部が失われているが、これは後世の搅乱によるものであると考えられる。2号は円筒形深鉢をやはり逆位に埋設したもので、これも掘り方は土器の大きさギリギリである。土器（第34図100）は口縁部及び底部を欠損している。



第24図 1号・2号単独埋甕

#### ○遺構外出土遺物および表面採取資料

遺構外から多くの遺物が出土しているが、その一部を図示した。土器（第32・33図83～98）は復元実測可能なものや大破片に限ったもので、実際にははるかに多くが出土している。土製品では、土偶（第35図5・6）、土製円盤（第36図16～23）などが出土している。石器も打製石斧（第42～45図81～131）、磨製石斧（第47図13～21）、磨石（第49・50図11～17）、凹石（第53図27～33）、多孔石（第55図12）、石錐（第56図1・8）、石匙（第57図15～21）、スクレイバー（第58図2）、尖頭器状先端部（第56図11）など数多く出土している。図では破片や明瞭な使用的痕跡の見られないものなどは除いてあるため、実数がさらに多くなることは確実である。

### 第4節 土 器

前述したように、本遺跡からは多くの土器が出土しているが、図示したのは遺構内外含めて、ちょうど100点である。本来であれば、未報告の土器なども含めて土器分類を行い詳細に検討すべきであろうが、紙面の都合上これは割愛する。

土器は井戸尻III式～曾利IV式までに限られている。遺構内外を含め、これ以外の時期の縄文土器は全く出土していない。確実に遺構に伴う埋甕や土坑内埋設土器などでは、6号住居跡や9号住居跡などの土器が井戸尻III式期で最も古く、12号住居跡が曾利IV式期で最も新しい。ほとんどの土器が当地方で普遍的にみられるものである。

器種では、深鉢がほとんどである。これ以外の器種は非常に少なく、鉢（26・86）、浅鉢（65・74・88）、台付鉢（27）、有孔鉢付（20・42）、片口？（76）ミニチュア（90）などがあるにすぎない。

### 第5節 土 製 品

土製品は第35図に一括した。今回の調査では土偶6点、土製円盤23点、土器片錐2点、土鉢1点が出土している。

土偶はすべてが中実の破損品で、破損部分を観察しても芯が確認できるものはない。これは小型のものが多いため「手こね」法で造られているためである。なお、明瞭な分割塊製作法によって造られているのは5のみで、5の失われた左足はソケット式にはめ込まれたものである。なお、脚部については、立体的に表現したもの（1・2・5・6）と省略したもの（3・4）の二種類がある。

土製円盤は、23点を図示したが、他に2点表採されており、25点の出土である。大きさ・厚さともバラツキが大きい。周辺の磨きも丁寧で正円にちかいものから雑なものまで差が激しい。完形品の重量は22が5.4gで最も軽く、6が36.1gで最も重い。なお、すべてが土器片の再利用であり、極端な屈曲部は用いていない。

土器片錐は2点だけの出土で、いずれも長軸に切り目を入れたものである。重量は8が16.5g、9が8.6gである。8は周囲も丁寧に磨かれている。

### 第6節 石 器

この節では、今回の調査において出土した、縄文時代の石器について報告するものである。

本報告を作成するにあたり、実測図に関しては、各器種とも紙面が許す限り掲載することに努めたが、全ての資料を実測図化した訳ではなく、破損状況などを考慮しての選択行為を行った。そして、実測図或いは計測表・報告文のうちいずれかに全ての資料が紙面上に重複せず現れるようした。

実測図については、基礎的データとなる器長・器幅・器厚・重量・石材・遺存度・破損状況・被熱・使用痕跡などは、実測図から読み取れるように掲載してある。従って、実測図が掲載されている資料に関しての計測表はここでは省略し、実測図を掲載していないものについては計測表を掲載しデータを補強してある。報告文については、各器種ごと記述しているが基本的には出土状況・石材・破損状況などの各項目を統計的に観察し、全体比

較できるように努めている。なお、報告文中の表現について予め述べておくが、完形という表現は、その石器の調整加工状況や形態から推定比較して部分的に破損をしていると判断されたもの以外について適用させた。また、破損（破損品）という表現は、折損・欠損・カケなどを含めた用語として統一使用している。

実 測 図 の 見 方	石材：原則としてローマ字読みとし、その頭文字を省略記号として用いた。 ホルンフェルス化が認められるものについてはカッコ付きでFと標記した。 安山岩→A 砂岩→S 粘板岩→N 灰岩→G 泥岩→D 黒耀石→K 緑色凝灰岩→RG チャート→C 花崗岩→Ka 片岩→H 斑れい岩→Hn 重量：重量：kg (kg)・g (g) 標記した。g (g) 単位では小数点一桁まで表したが、kg (kg) 単位はこの限りではない。
----------------------------	--

#### 打製石斧（第37～44図）

出土した打製石斧は表採品を含めて131点である。全体組成から見ると26.5%を占め、出土量が最も多い器種である。出土状況の傾向として、住居跡内からの出土率が131点中74点（56.4%）と高く、その内4号住居跡からは24点（31.4%）、5号住居跡は12点（9.1%）の出土と多い。グリッド出土は41点（31.2%）、土坑出土は6点（4.5%）、10点が表採となる。石材の状況は、粘板岩が68点（51.9%）、砂岩が46点（35.1%）、次いで凝灰岩・片岩の順で利用されている。破損状況は、41点（31.2%）が完形で、刃部・基部にカケの現象が明確に認められるものが30点（22.9%）、遺存度が推定1/2～1/3にあるものが60点（45.8%）となる。これに関連して、破損した部位の状況について観察したところ、節理など石材に起因があるものが破損品90点中24点（26.6%）、背面ないし腹面の一方向からの加撃による破損が35点（38.8%）、多方面または観察不能が30点である。参考までに、所謂三形態分類でみると、短冊型は95点（72.5%）、撥型34点（25.9%）、不定形・不明が2点である。

#### 磨製石斧（第46～47図）

出土した磨製石斧は、表採品含めて計21点で、全体組成からみると4.0%を占める。特徴としては、完形品の1点に対し破損品が20点（95.2%）と破損率が非常に高い。破損部位については、20点中11点（55%）が基部にカケが生じている。形態は、所謂「定角式」が14点と最も多く、「乳棒状式」は2点、遺存度が悪く判断できないものが5点である。石材については、緑色凝灰岩が15点（71%）と圧倒し、残りに砂岩・凝灰岩が認められる。

#### 石皿（第48図）

資料数は、表採品含めて7点で、全体組成からみると1.4%を占める。使用面数は全点1面である。出土状況は、完形品が1点土坑内より出土しているほかは全て住居内出土であり、4号住居跡からは、共に破損品だが2点出土している。石材としては、安山岩が7点中6点と使用頻度が高く、次いで砂岩が使用されている。

#### 磨石（第49～50図）

資料数は、39点を数え、全体組成からみると7.9%を占める。磨石に分類されたものは大きく2種類あり、石器の全表面ないしは1から数面にわたり磨られた痕跡が観察され、一般的な磨石に分類されるものと、大きさや形態、磨られた痕跡の状態が前者とは異なり、土台のような機能を想定させるもの（第49図7～11）と分類した。石材は安山岩の利用頻度が高く、次いで砂岩が多い。また、両者とも完形率は非常に高い。

#### 凹石（第51～53図）

資料数は33点で、全体組成からみると6.6%を占める。凹石に分類されたものは、橢円形の礫を素材とし、径1cm前後の窪みが形成されたものである。完形率が非常に高く25点（75.7%）で破損率は7点（21.2%）である。利用している石材も27点（81.8%）が安山岩で、僅かに砂岩が存在するのみである。窪みの数も1個から最多の5個までまちまちではあるが、2個が最も多く13点（39.3%）を占める。出土状況では、住居跡内から出土する傾向が強く24点（72.7%）で、各住居3～4点の割合で出土している。

#### 特殊石器（第54図）

形態的に、他の石器種とは異なり、他に分類できないものをまとめた。資料数は3点で、全体組成からみると0.6%を占める。1は、10号住居跡から出土し、穿孔部分を持つ安山岩製のものである。2は、4面にわたり4カ所の窪みが存在している。窪みは、敲打によって作出されたものというよりはむしろ、連續的な摩擦により生じ

た痕跡が観察される。更に3は、平坦面を數面持つ多面体で、3ないしは4カ所の窪みが認められる。石材は砂岩である。窪みの状況は、2と同様である。2・3については、大きさは片手に具合良く取まり、所謂凹石の延長上に位置する石器の可能性があるが、分類は異にした。なお、特に破損と呼べる状況は観察されない。

#### 多孔石（第55図）

資料数は14点で、全体組成からみると2.8%を占める。出土状況としては、14点中12点（85.7%）が住居内出土で、且つその内の6点は5号住居跡からの出土である。残り2点は表採である。遺存度は非常に悪く、全点破損品である。石材は、砂岩が14点中8点（57.1%）と使用頻度が高く、他に安山岩が観察されている。

#### 石礫（第56図1～8）

出土数は8点で、全体組成からみると1.6%を占める。石材は、1点のみチャートで、残り7点には黒曜石が使用されている。遺存度は8点中3点（37.5%）に脚部破損が認められる。形態は、大きさに違いがあったり、側縁部が直線或いは外側に張り出している差はあるが、基本的には変化はない。

#### ドリル（第56図9）

資料数は1点で、全体組成からみると0.2%を占める。粘板岩製である。

#### 尖頭器状（第56図10・11）

破損品であるため器種が不明な資料だが、尖頭器の端部に類似していることからこの項目を設定した。資料数は2点で、全体組成からみると0.4%を占める。10は黒曜石製で両面に両側縁から加工がなされている。11は凝灰岩製でやはり両面に両側縁から加工がなされている。破損は筋理面による。

#### 二次加工剝片（第56図12・13）

資料数は2点で全体組成からみると0.4%を占める。11は縦長剝片である。腹面の片側縁を省き側縁加工がなされている。12は横長剝片で、背腹面の一部には調整剝離がなされている。両者とも両端部は折損している。

#### 石匙（第57図1～21）

出土数は表採品含めて22点で、全体組成からみると4.4%を占めている。形態的には、縦長が12点と横長が9点の半々で存在している。遺存状況は、完形率が22点中16点（72.7%）と高く、特に刃部に破損が認められるものが5点である。出土状況では、22点中8点（36.3%）が4号住居跡から出土しており、1軒の住居から同一器種がまとまって出土する稀な出土状況である。石材としては、粘板岩の利用が22点中9点と最も多く、次いで凝灰岩・黒曜石・泥岩・砂岩・頁岩・片岩の順で使用されている。

#### スクレイパー（第58図）

資料数は9点を数え、全体組成からみると1.8%を占める。図示したものは、その内の形態が類似しているものと特徴的なものの3点である。上述した二次加工剝片とは、素材となる剝片と加工の状態により敢えて分割し分類した。スクレイパーに分類されたものは、不定形の剝片に調整・加工、微細剝離が観察されるものである。

石材としては、粘板岩・凝灰岩が多く使用されているようである。

#### 石錐（第59図）

資料数は4点で、全体組成からみると0.8%を占める。粘板岩の使用頻度が4点中3点と高く、次いで砂岩が使用されている。図示した1～3は粘板岩製で、大きさ・重量に変化はなく、素材の長軸方向に2カ所の抉りが作出されている。4は、砂岩製でやや大型で4カ所に抉りをもつ。全て住居内出土である。

#### 石棒（第60図）

資料は1点のみで、全体組成からみると0.2%である。出土位置は12号住居内で、破損品である。安山岩製で、先端部に研磨が観察される。

#### 剝片

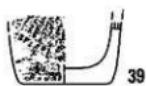
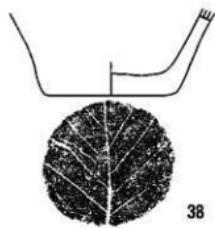
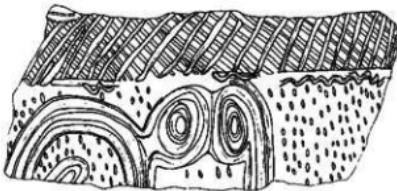
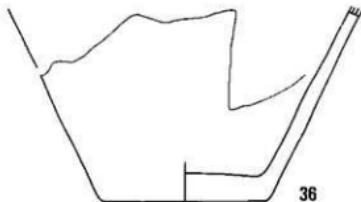
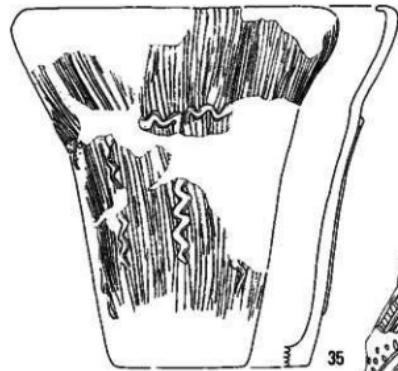
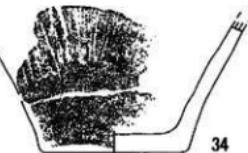
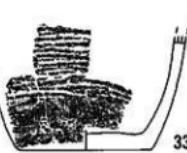
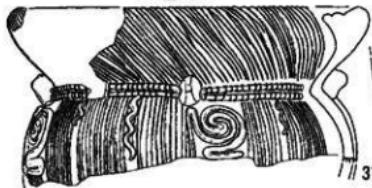
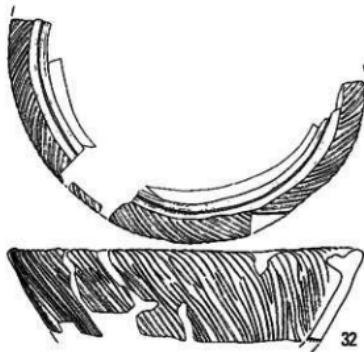
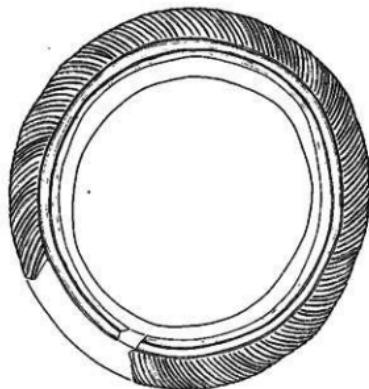
資料数は197点を数える。全体組成からみると39.9%を占める。本報告では、特に図示していないが、打製石斧や石匙などの石材利用状況と比較すると、これらは粘板岩・砂岩に利用頻度が高いのに対し、剝片は安山岩で5cm以上のものが圧倒的に多く、粘板岩・砂岩は30点程度で5cm以下のものが多いことが剝片の特徴としてある。



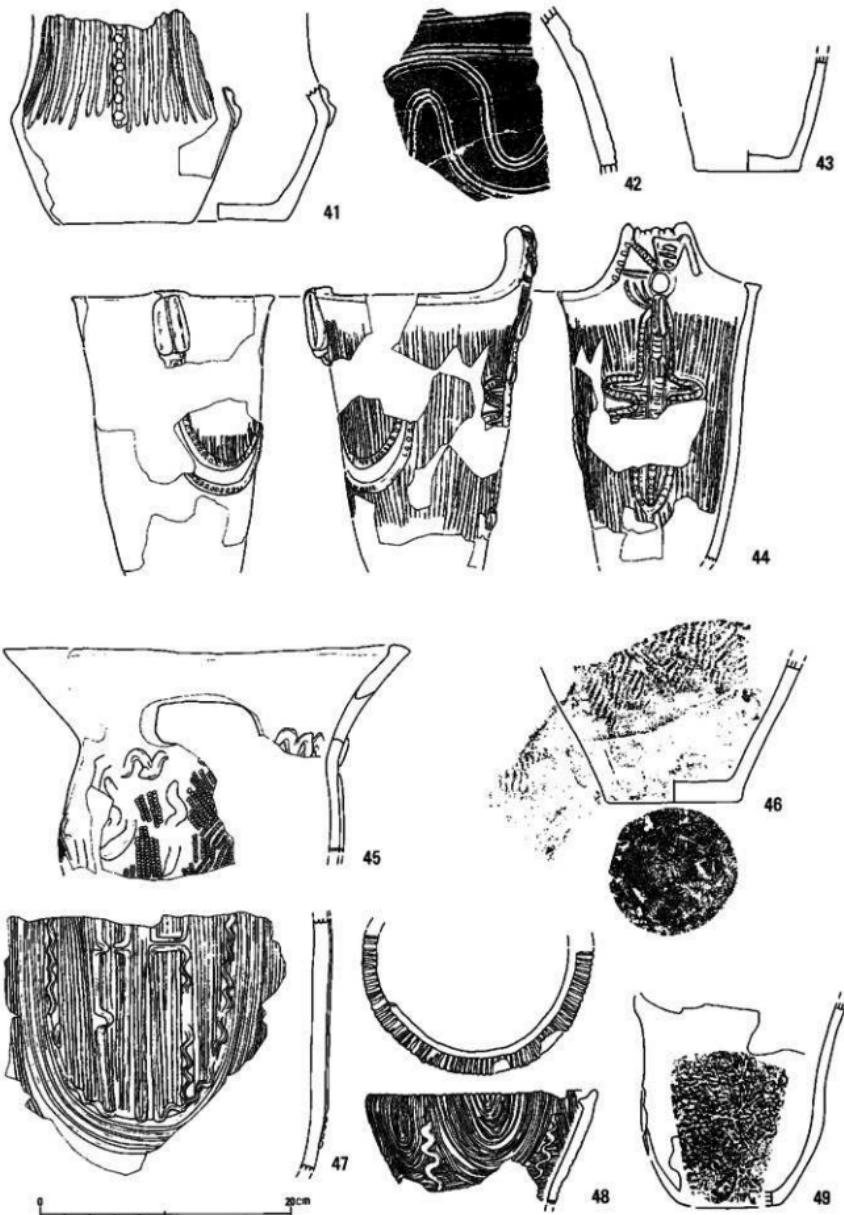
第25図 出土土器その1 (1号住居跡～3号住居跡)



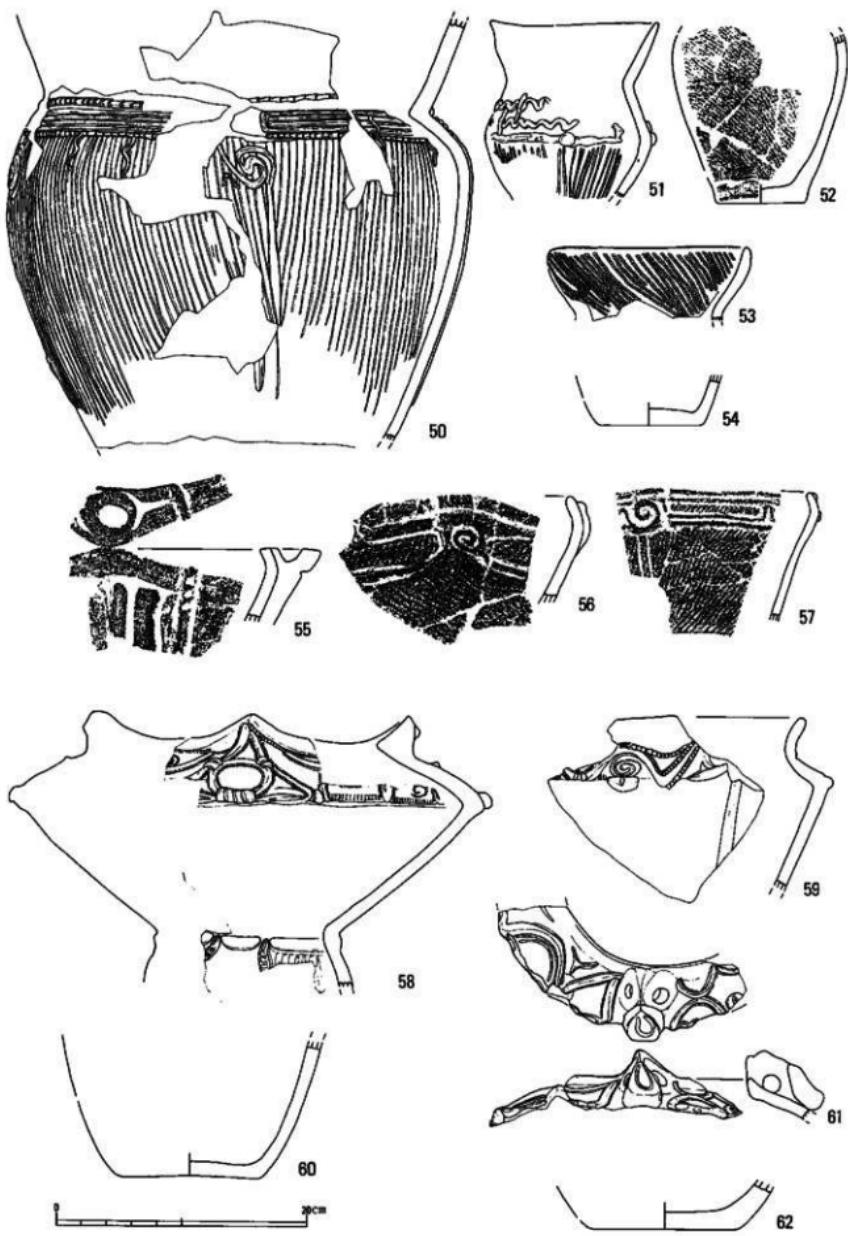
第26図 出土土器その2 (4号住居跡、5号住居跡)



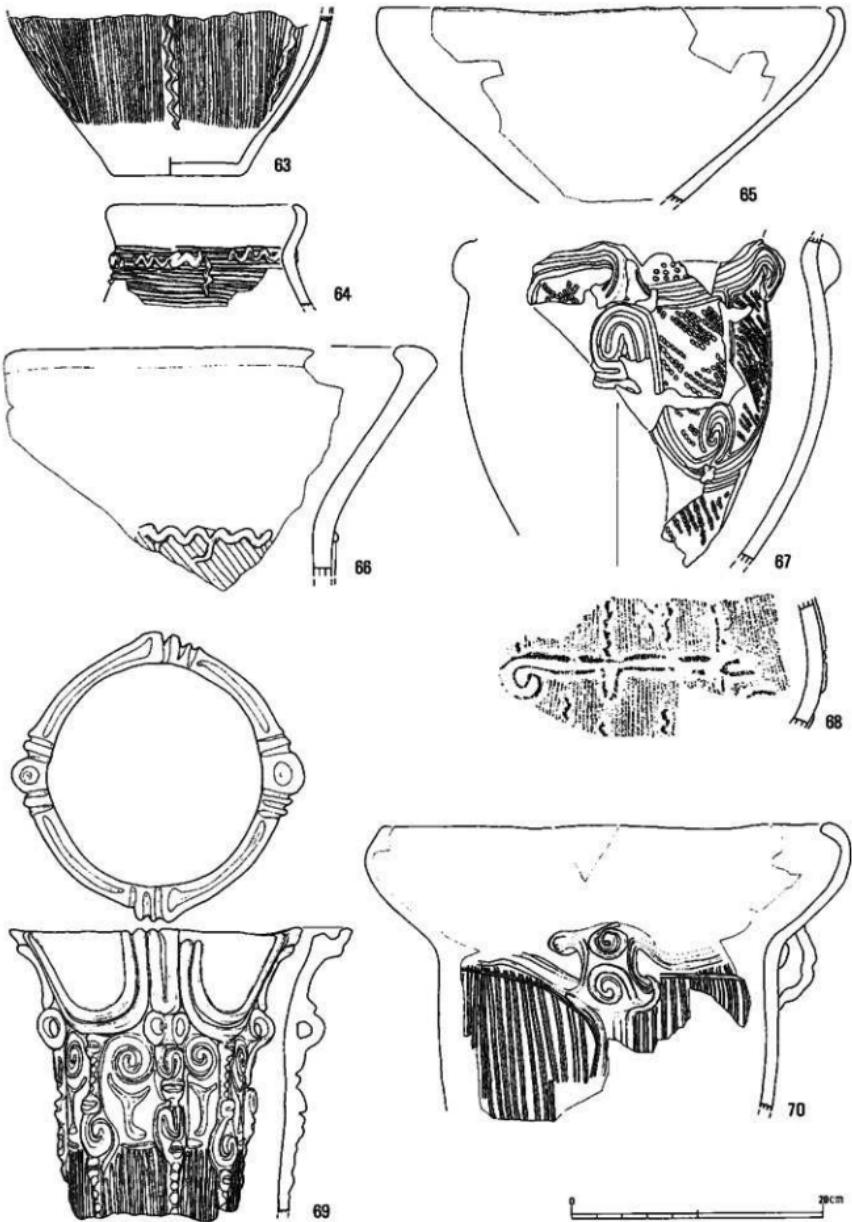
第27図 出土土器その3（5号住居跡）



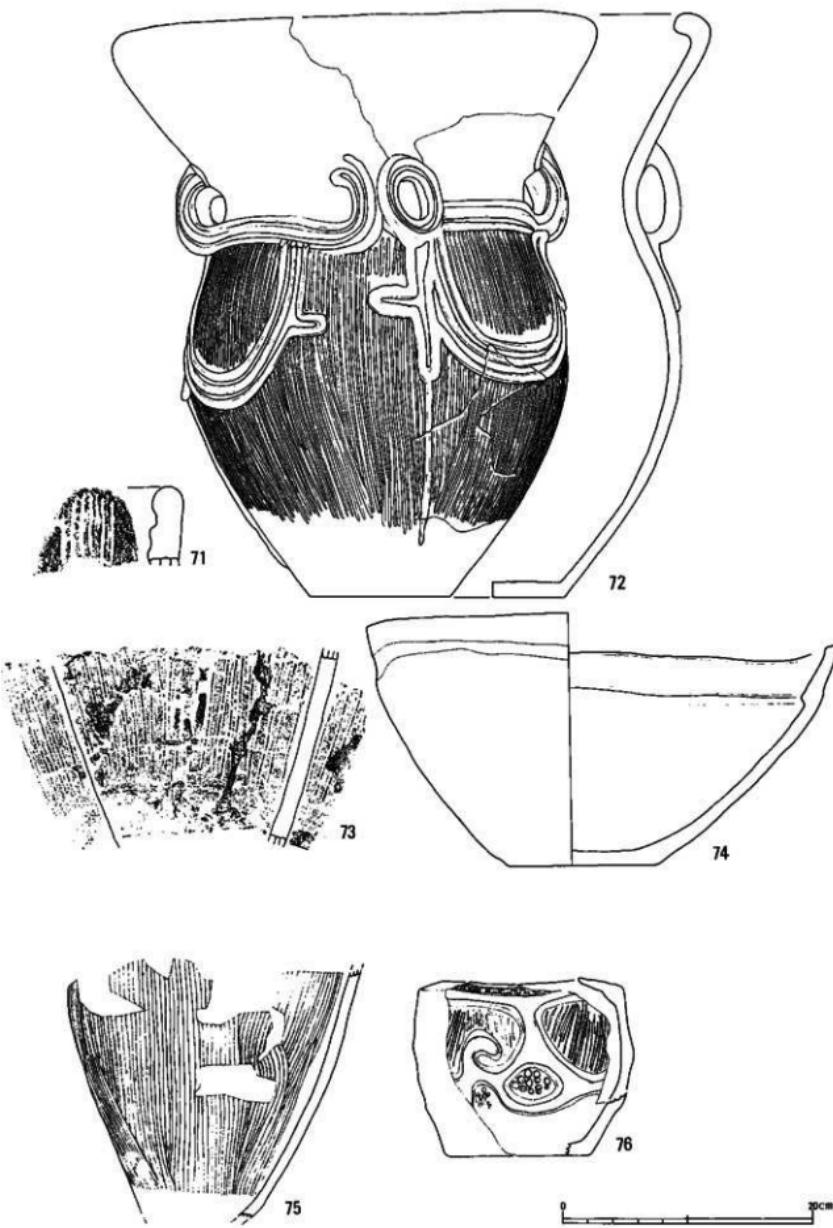
第28図 出土土器その4（6号住居跡、7号住居跡）



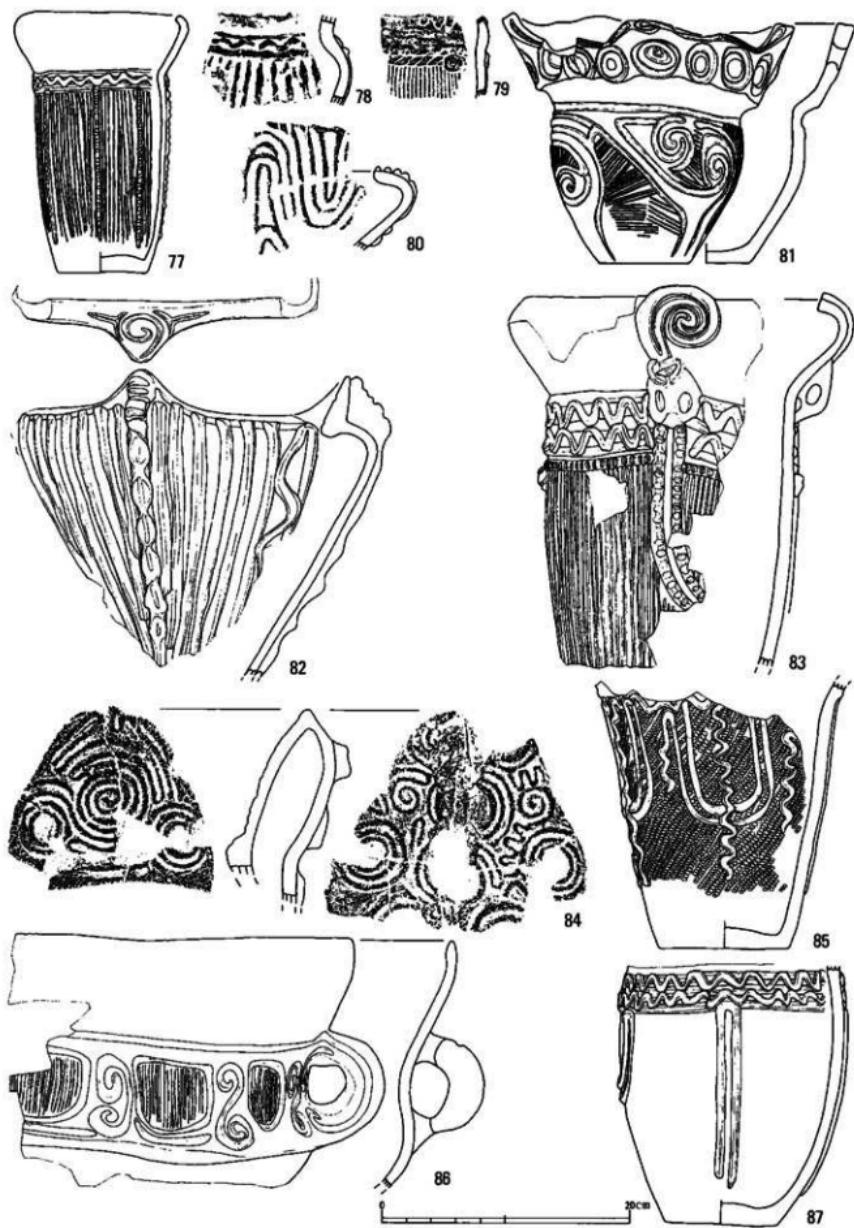
第29図 出土土器その5 (8号住居跡、9号住居跡)



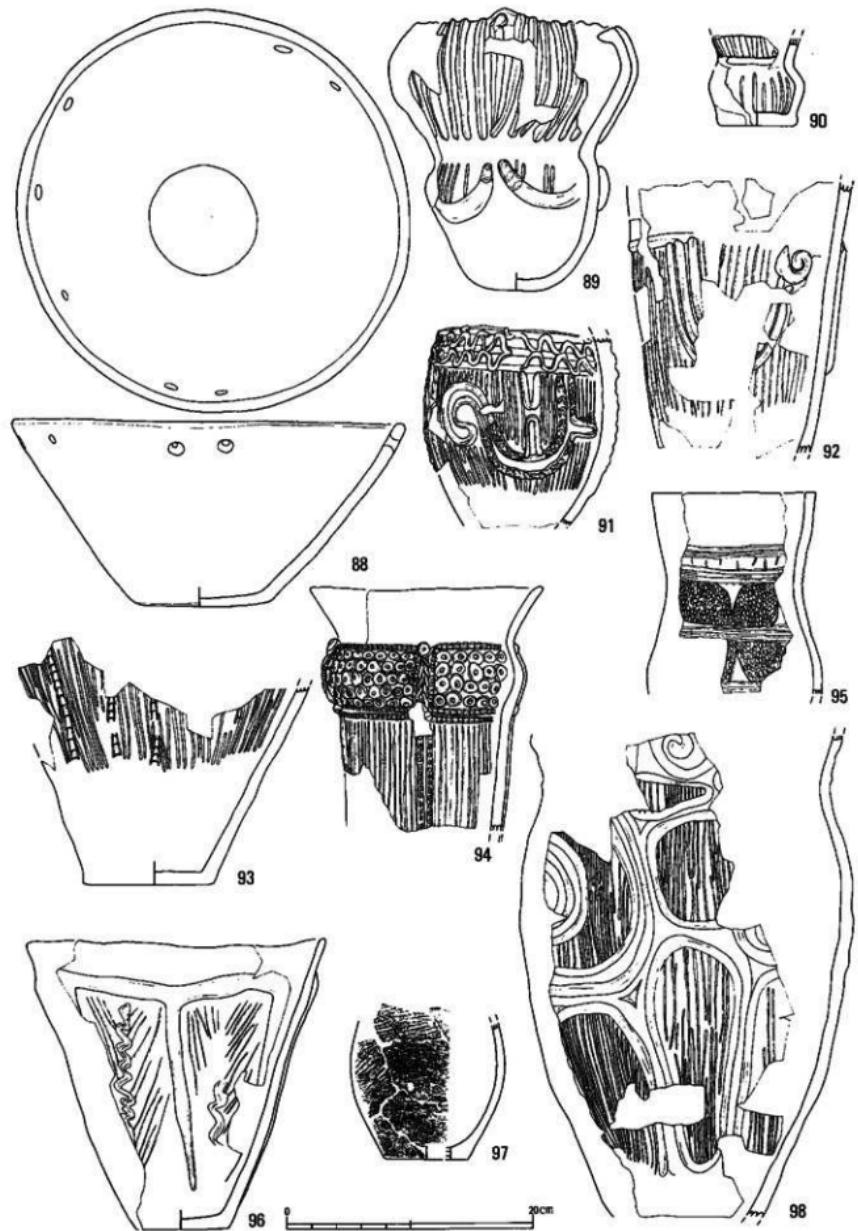
第30図 出土土器その6 (10号住居跡、11号住居跡)



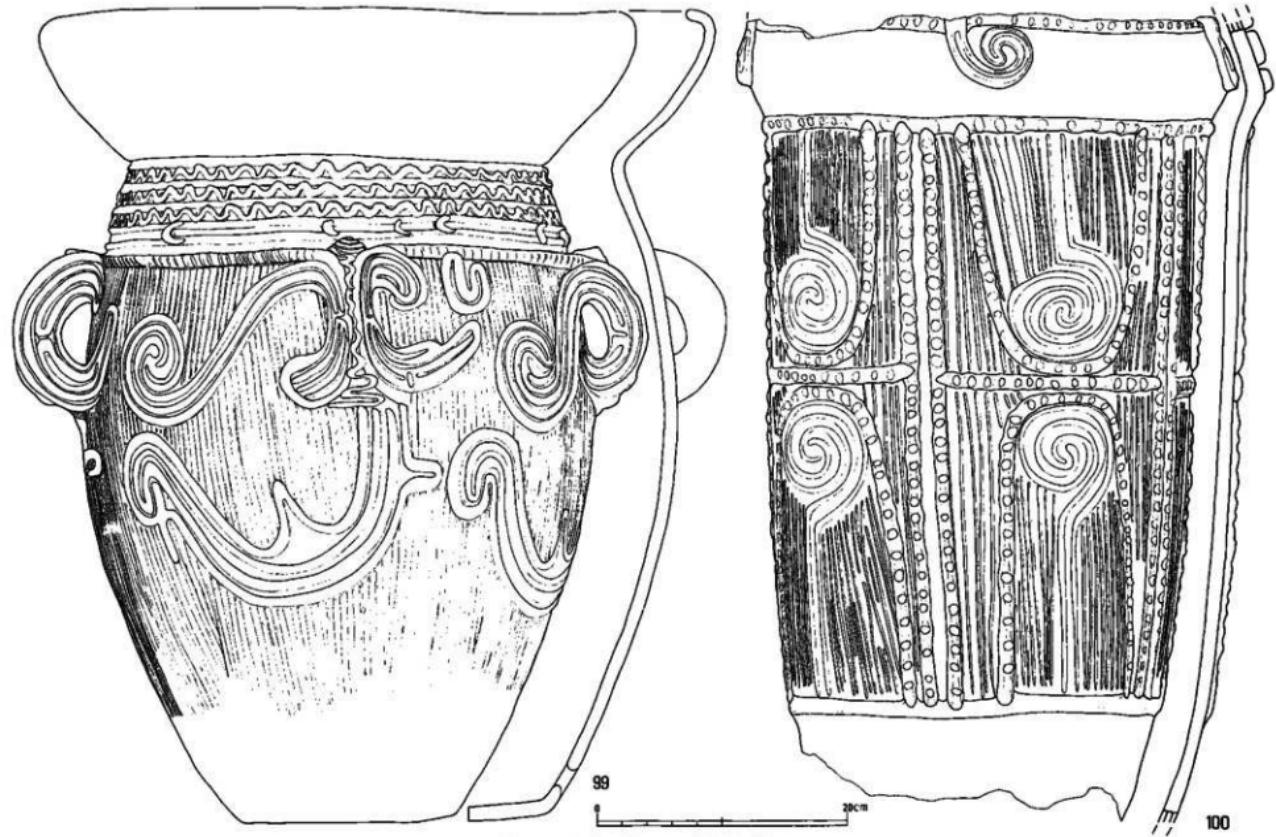
第31図 出土土器その7 (12号住居跡、13号住居跡)



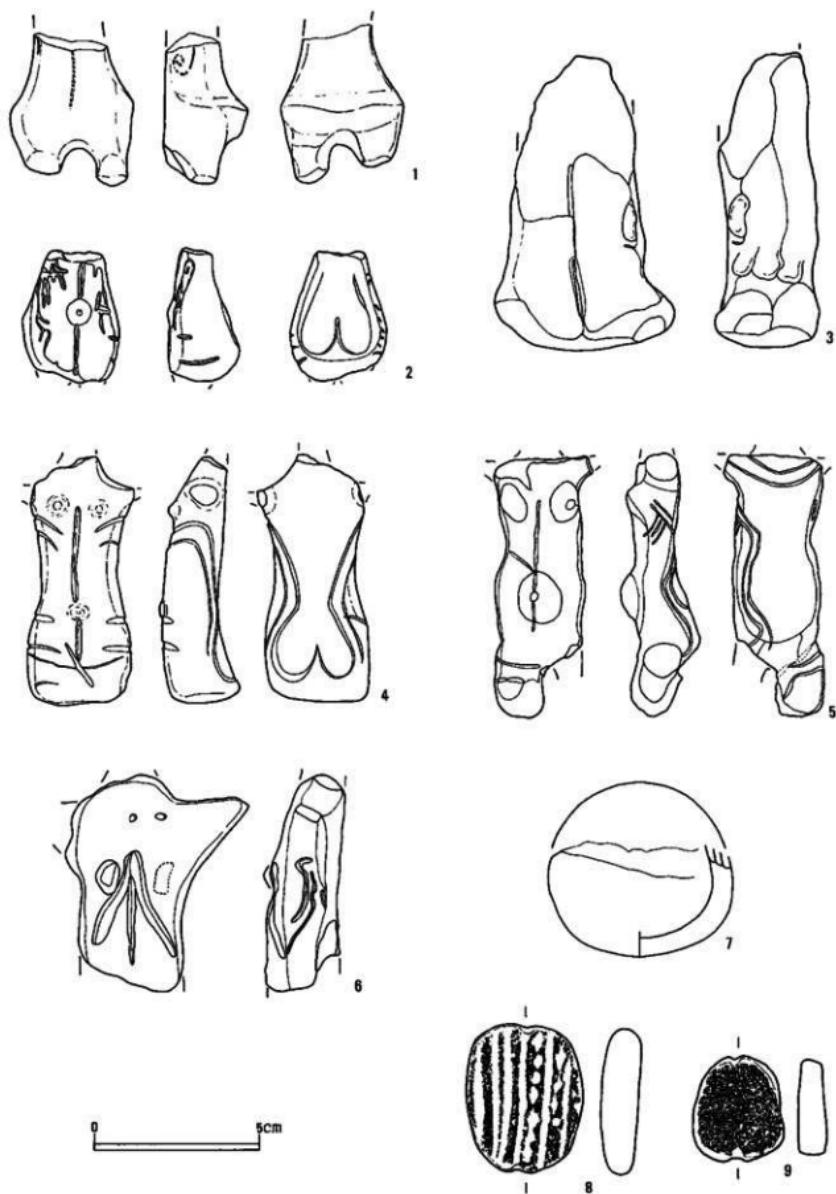
第32図 出土土器その8（土塙、グリッド）



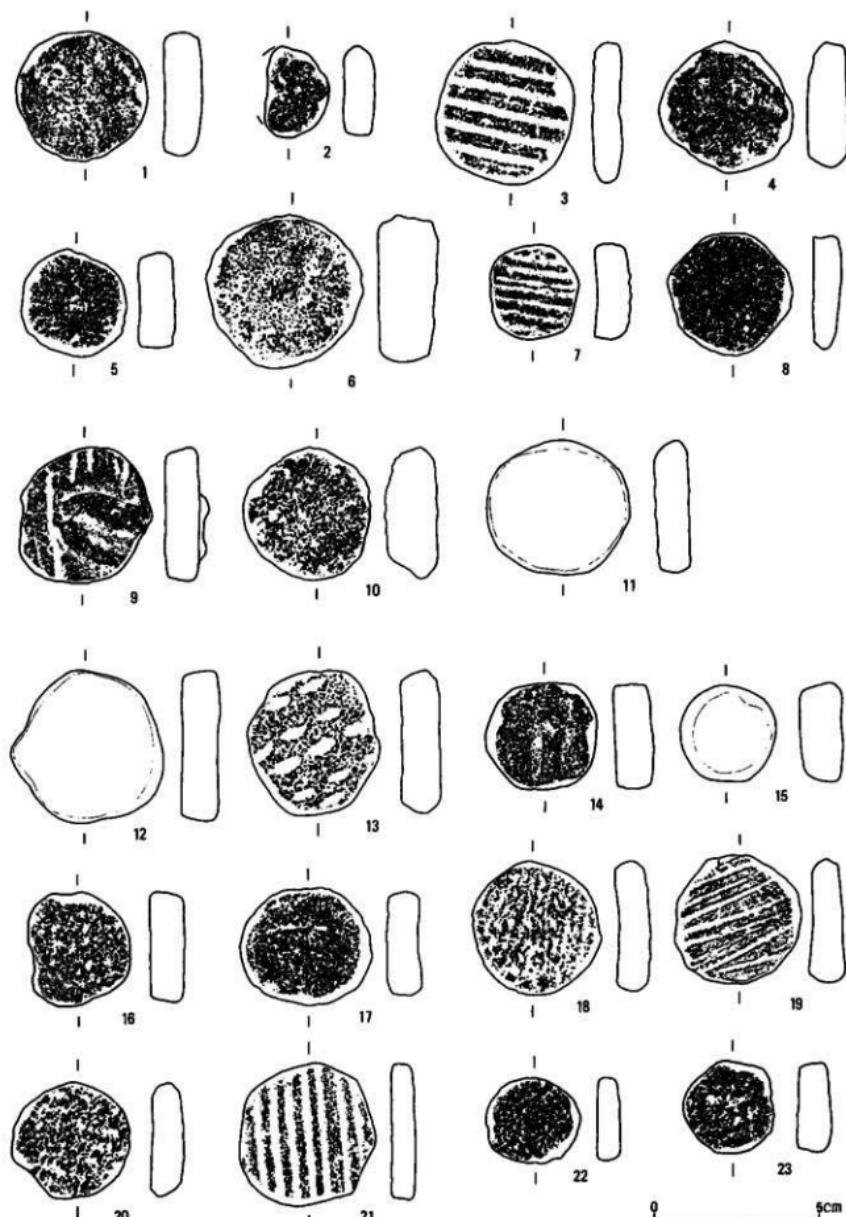
第33図 出土土器その9 (グリッド、表採)



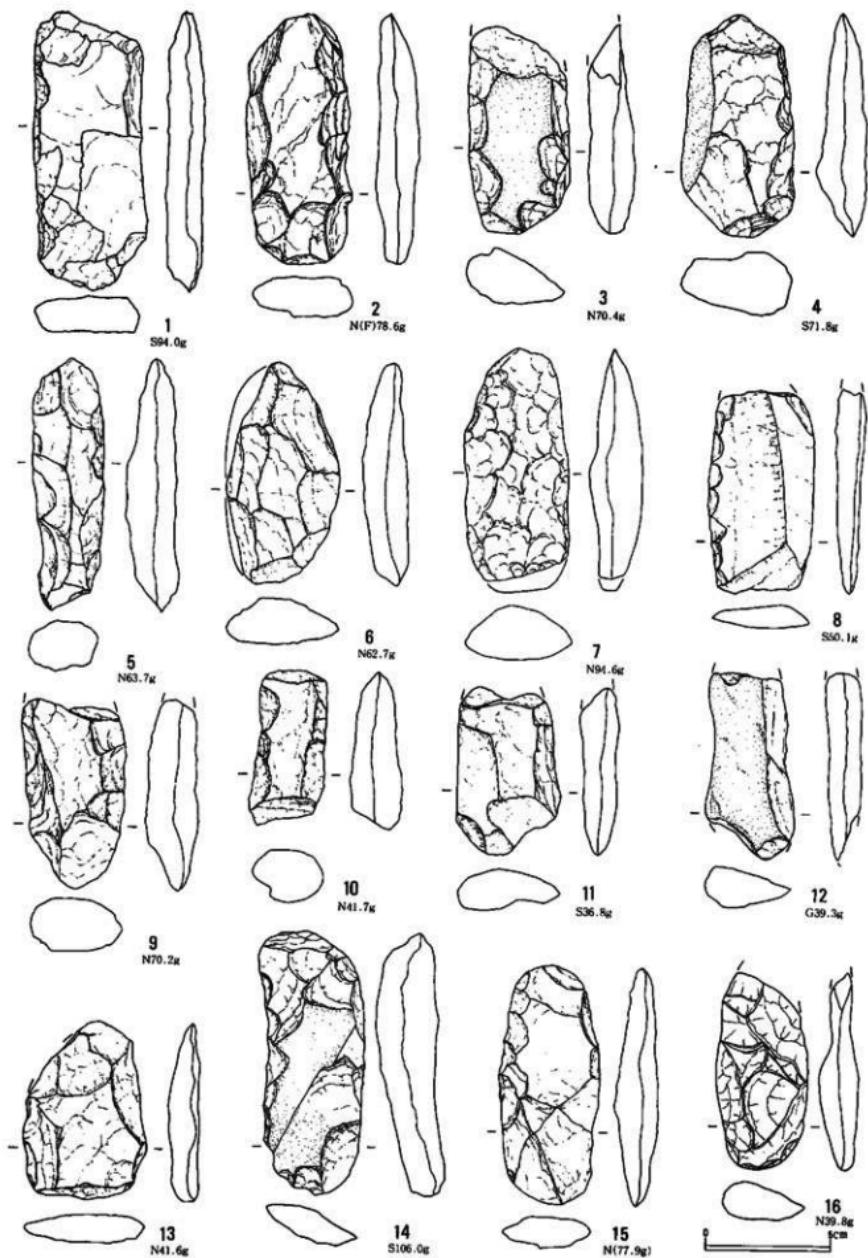
第34図 出土土器その10（単独埋蔵）



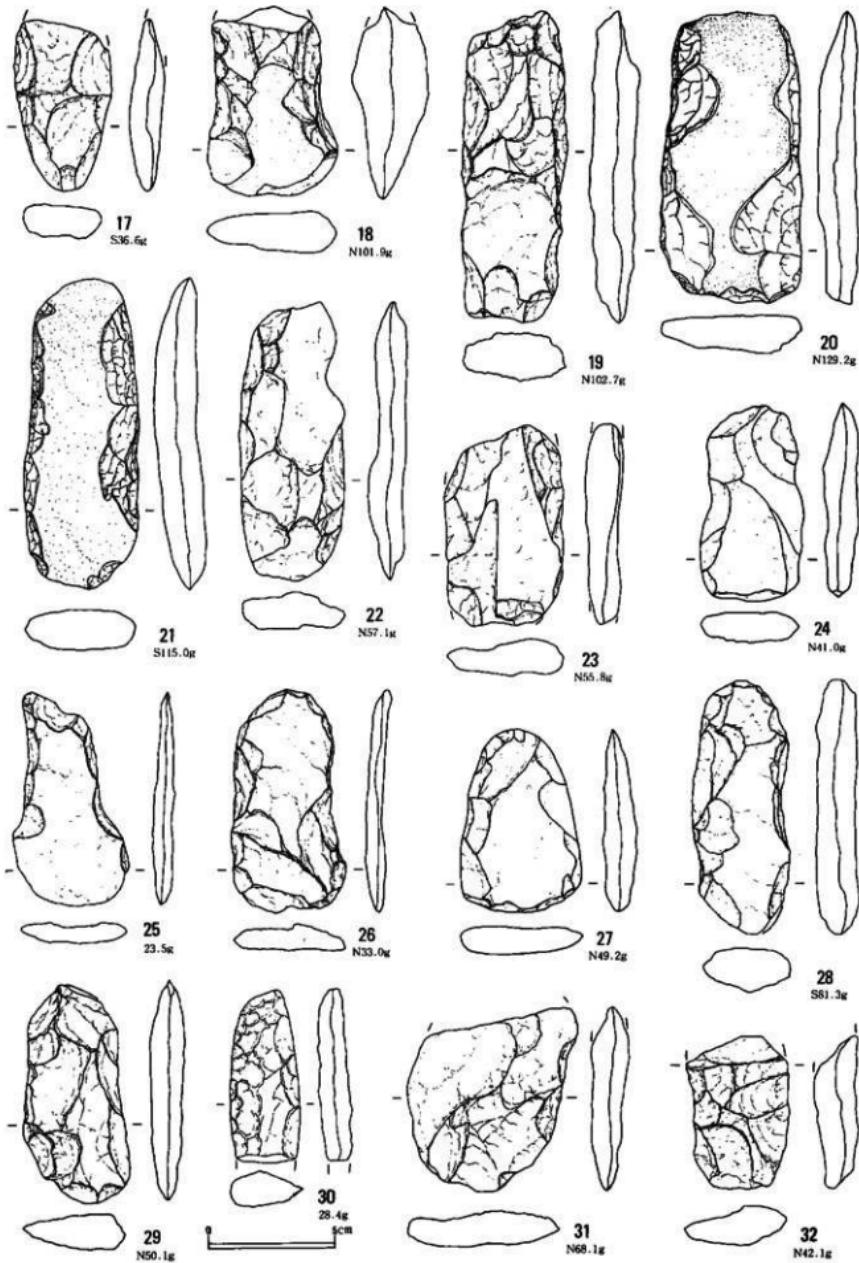
第35図 土偶・土鉢・土器片鱗



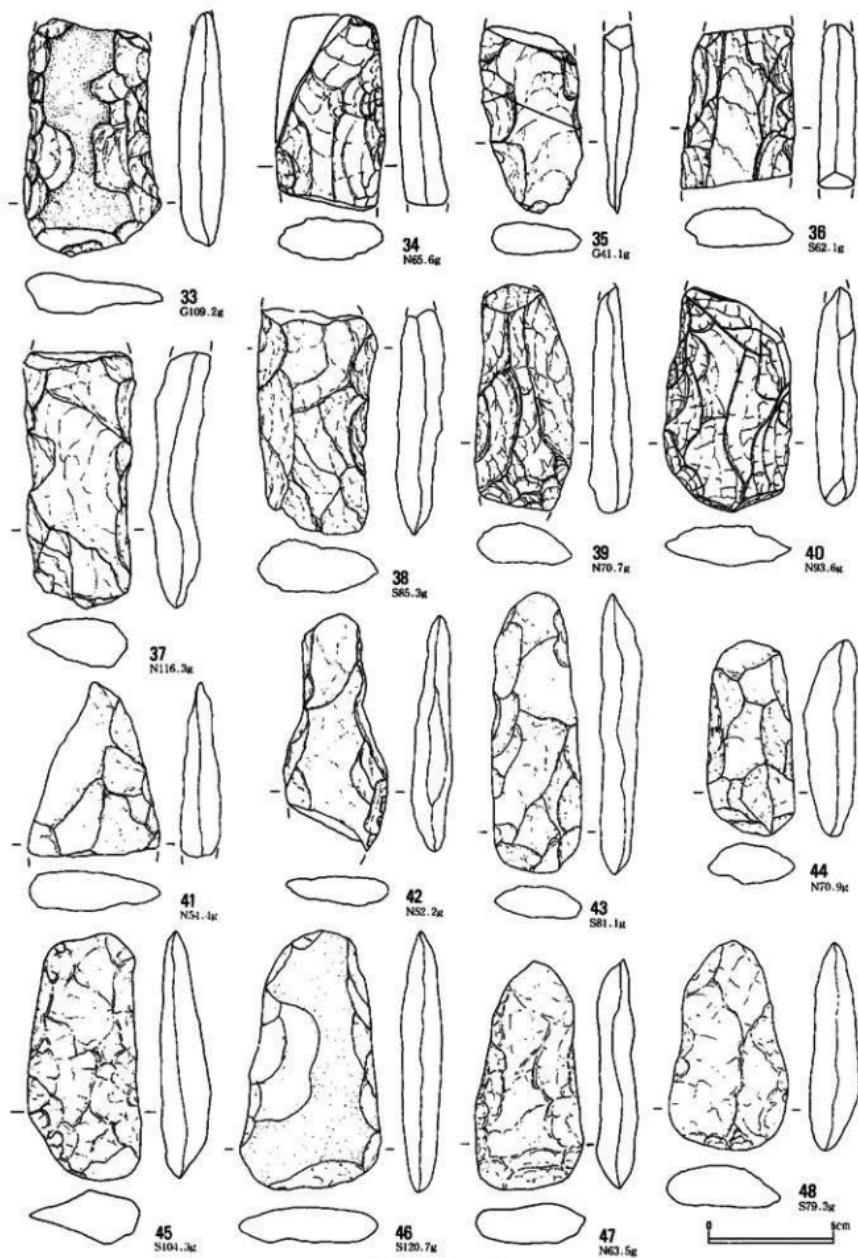
第36図 土製円盤



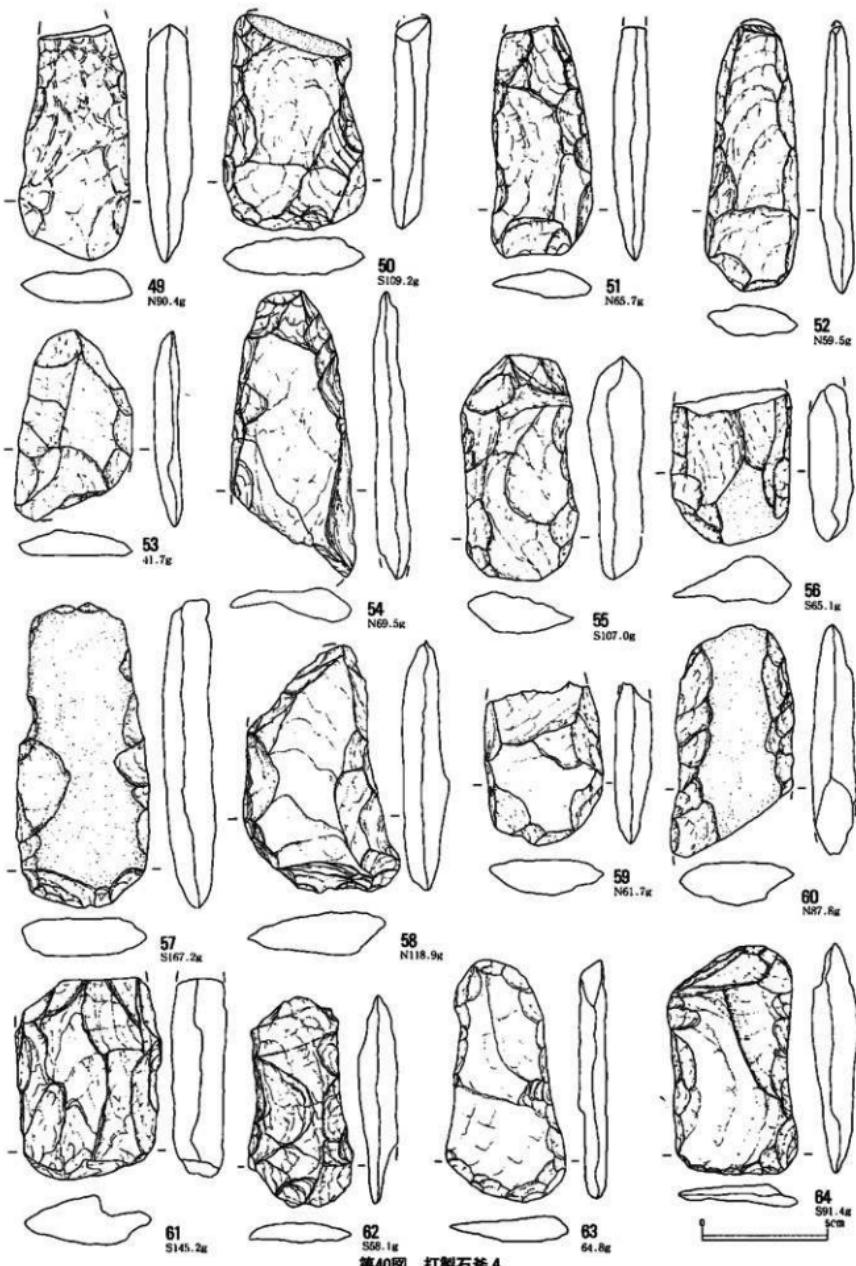
第37圖 打製石斧 1



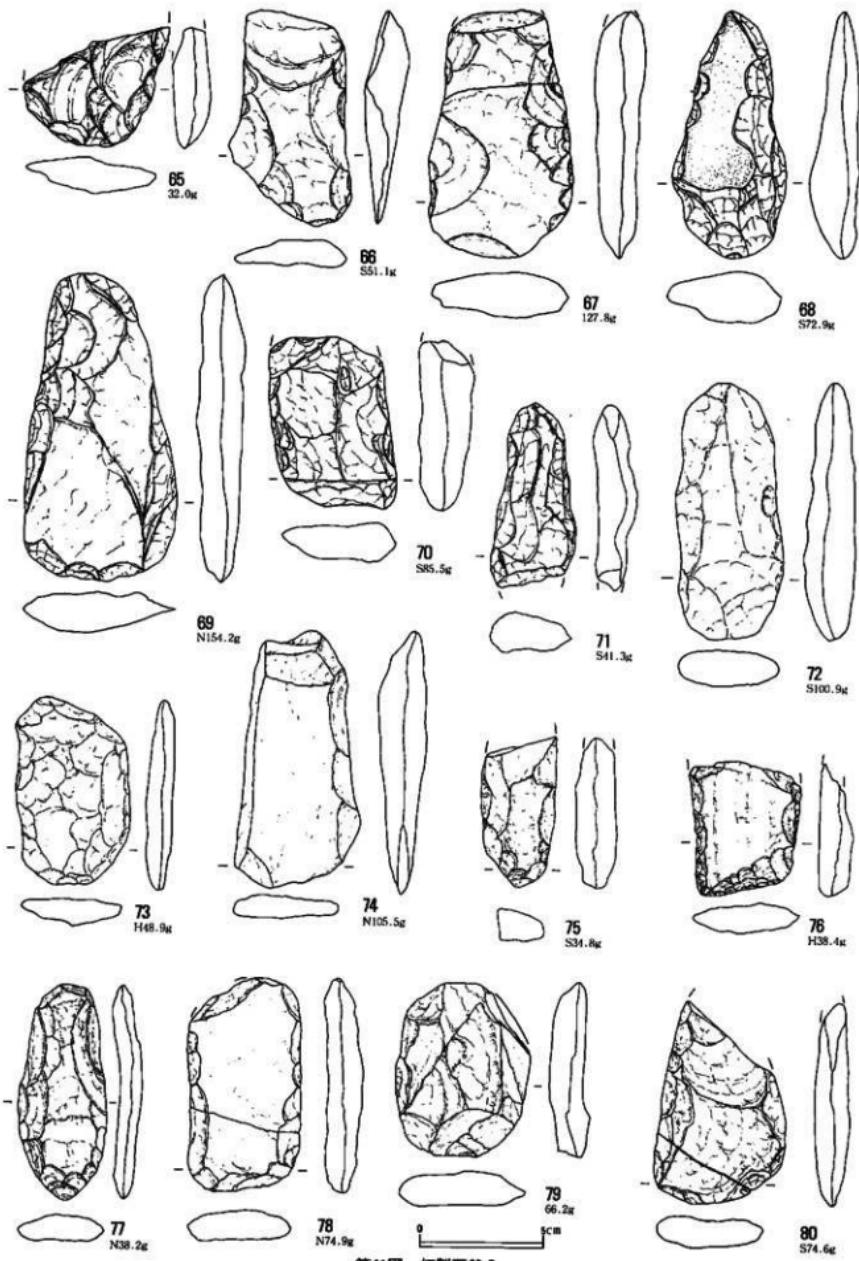
第38図 打製石斧 2



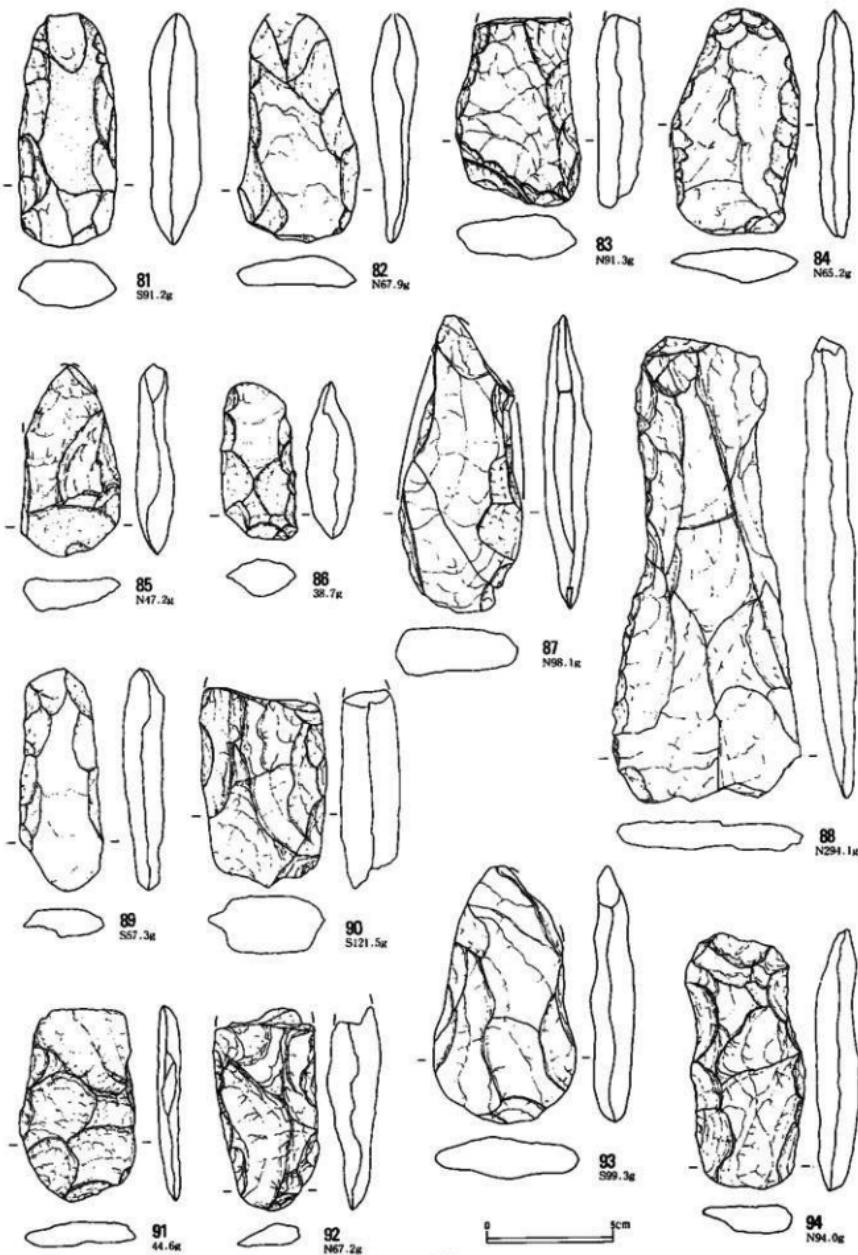
第39圖 打製石斧3



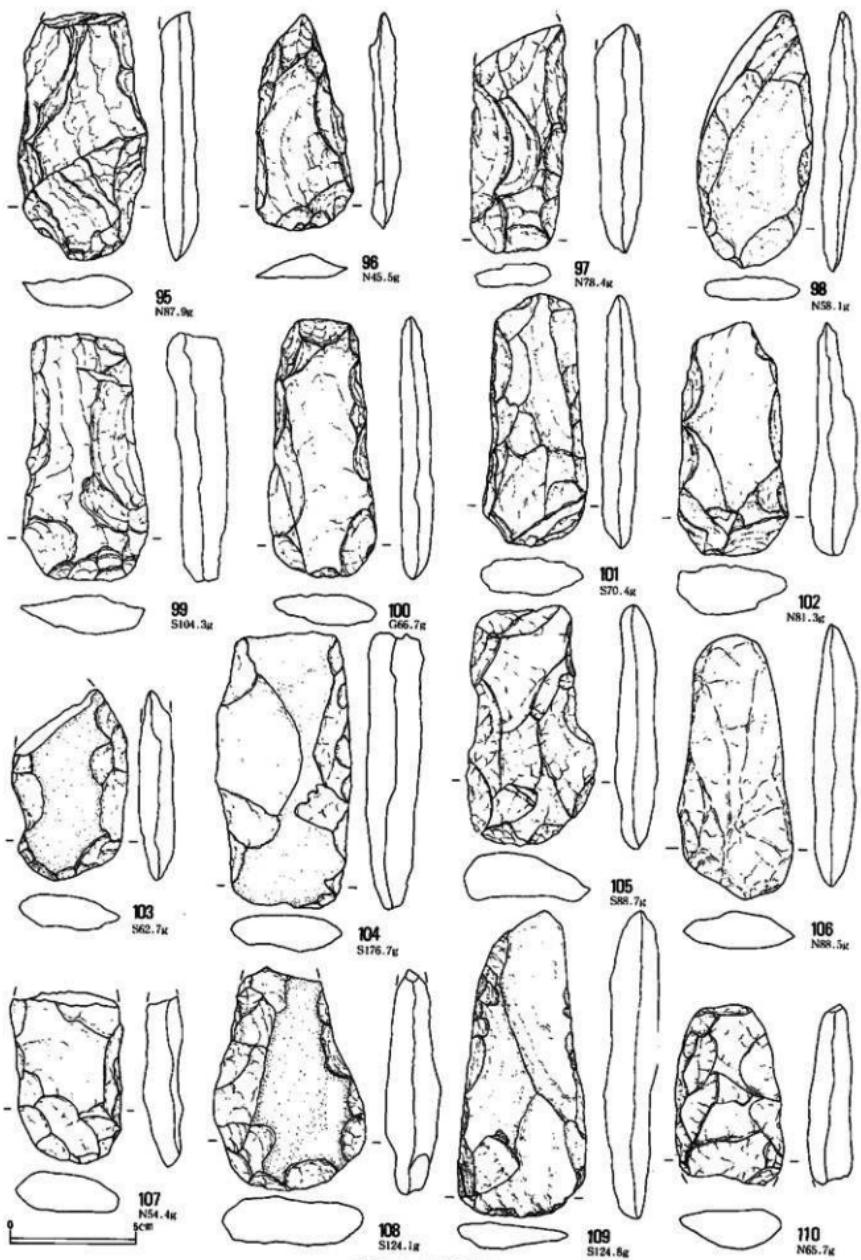
第40図 打製石斧4



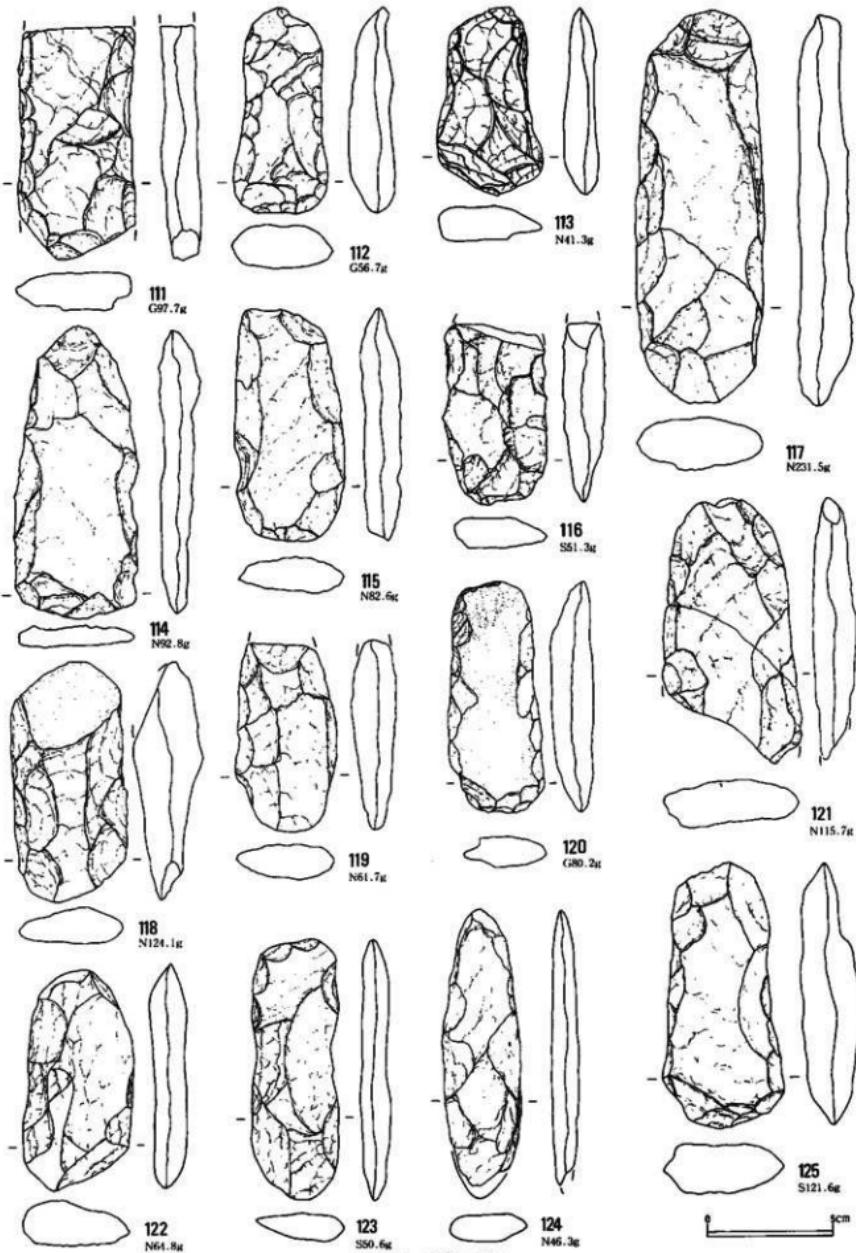
第41圖 打製石斧 5



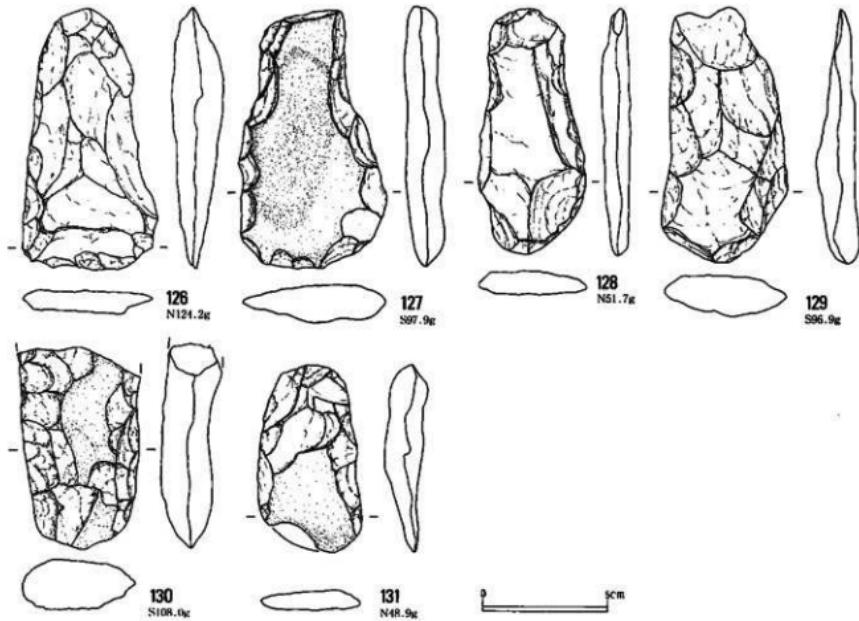
第42圖 打製石斧 6



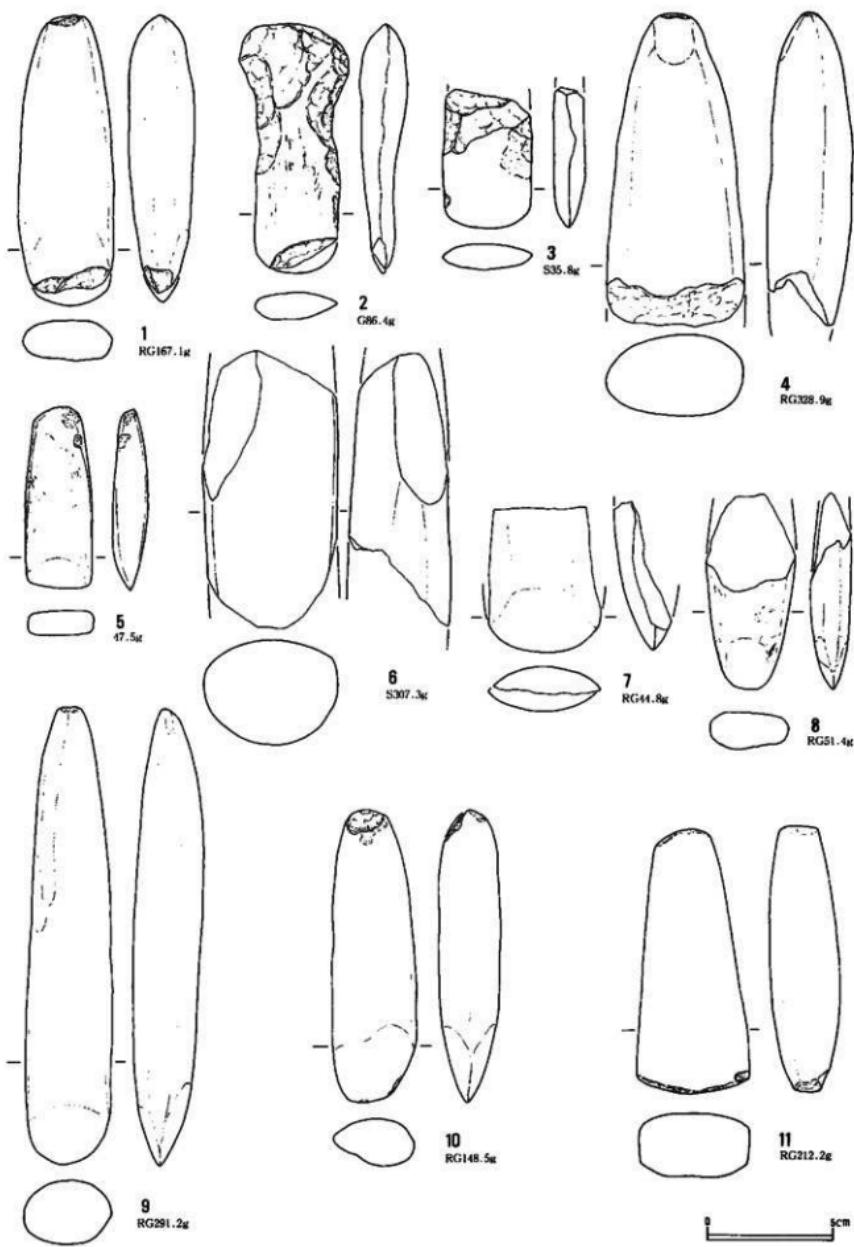
第43図 打製石斧 7



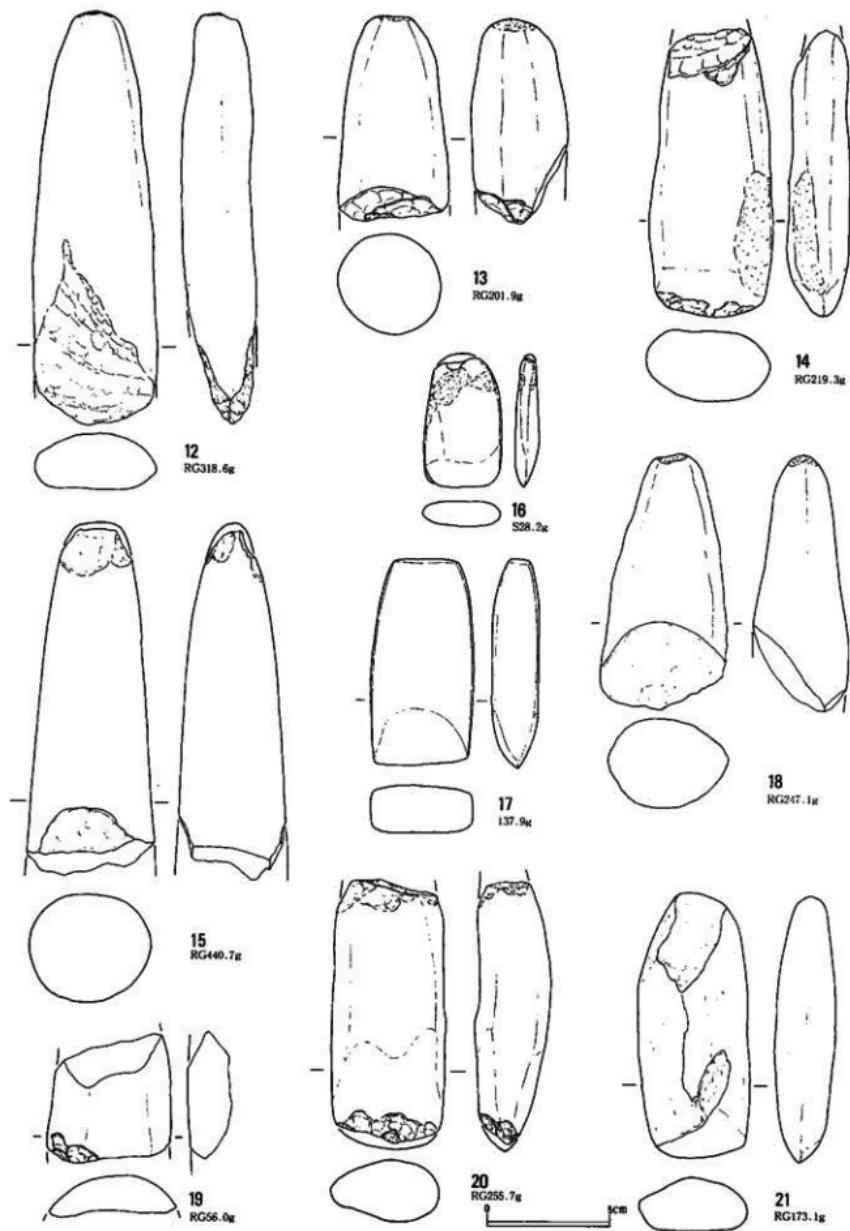
第44図 打製石斧 8



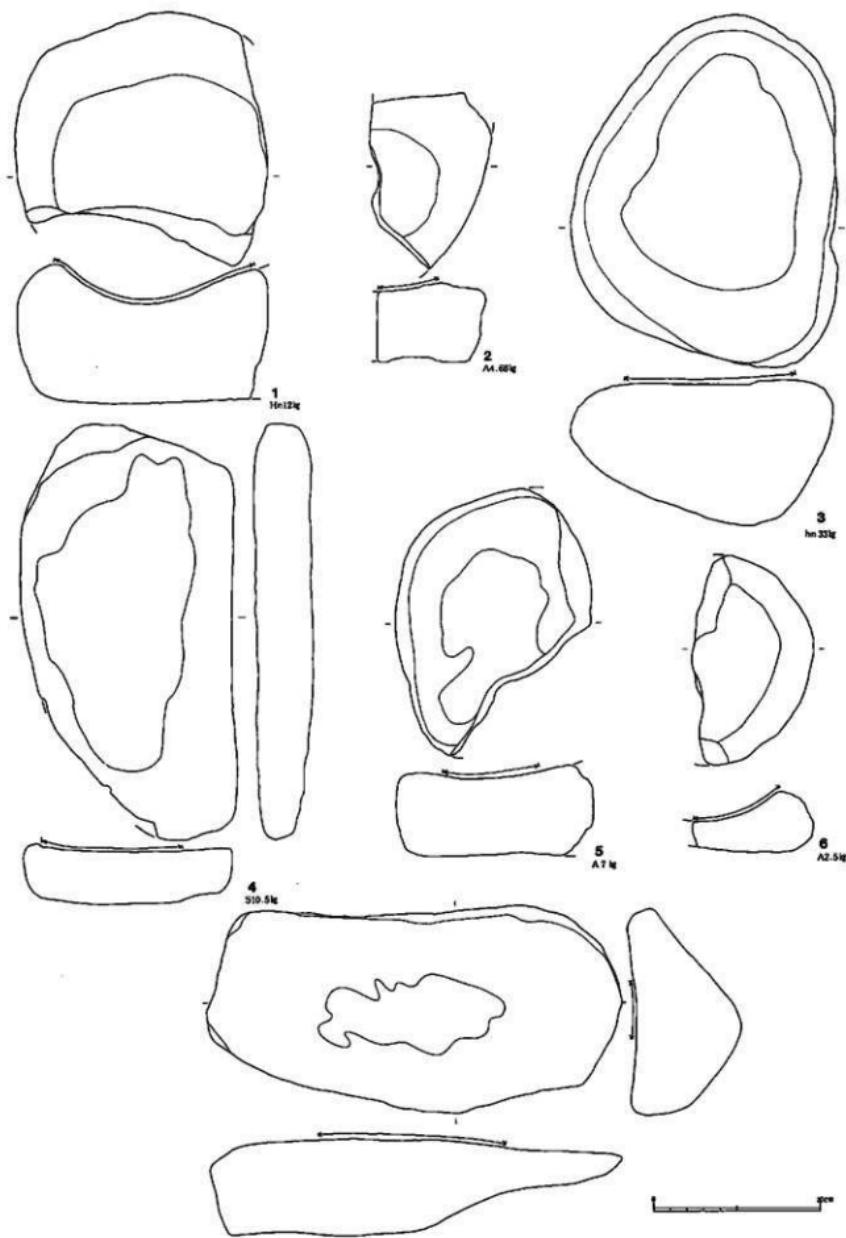
第45図 打製石并 9



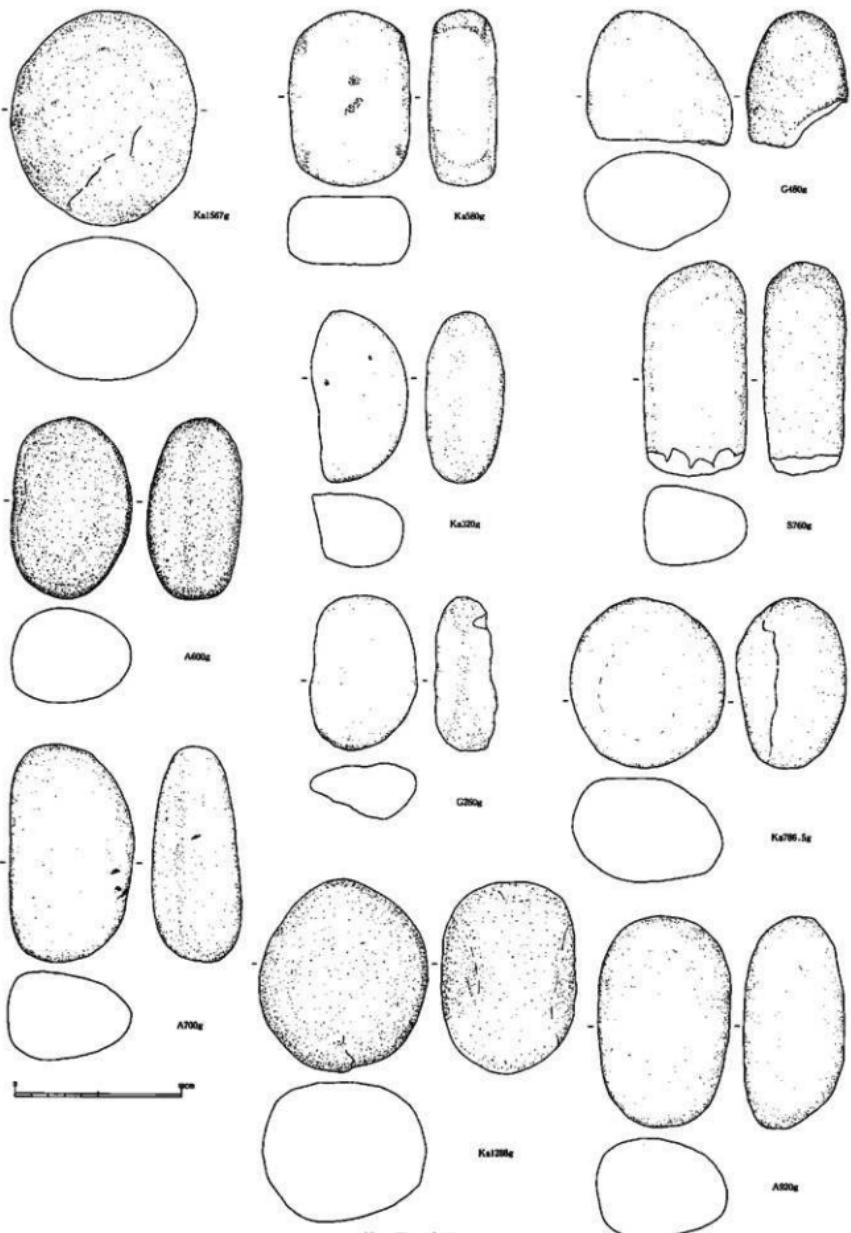
第46図 磨製石斧 1



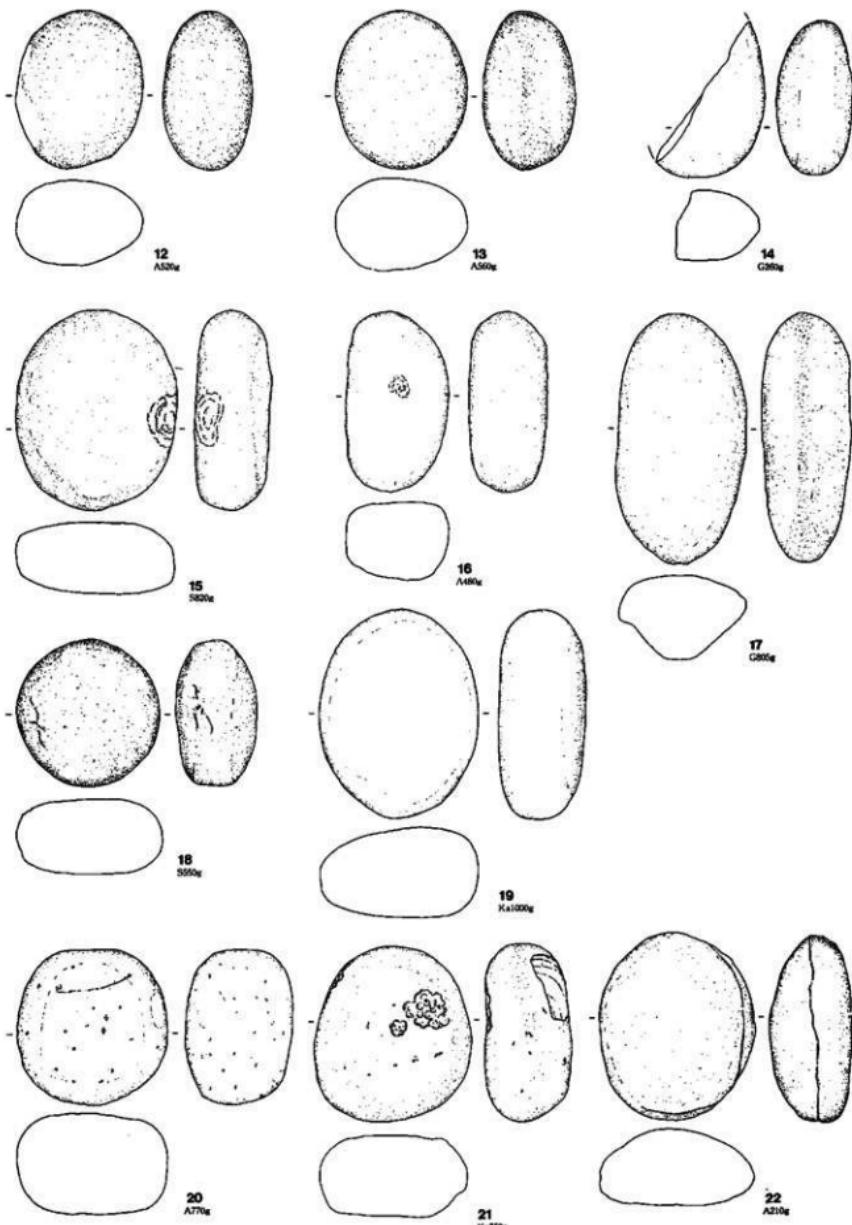
第47図 磨製石斧2



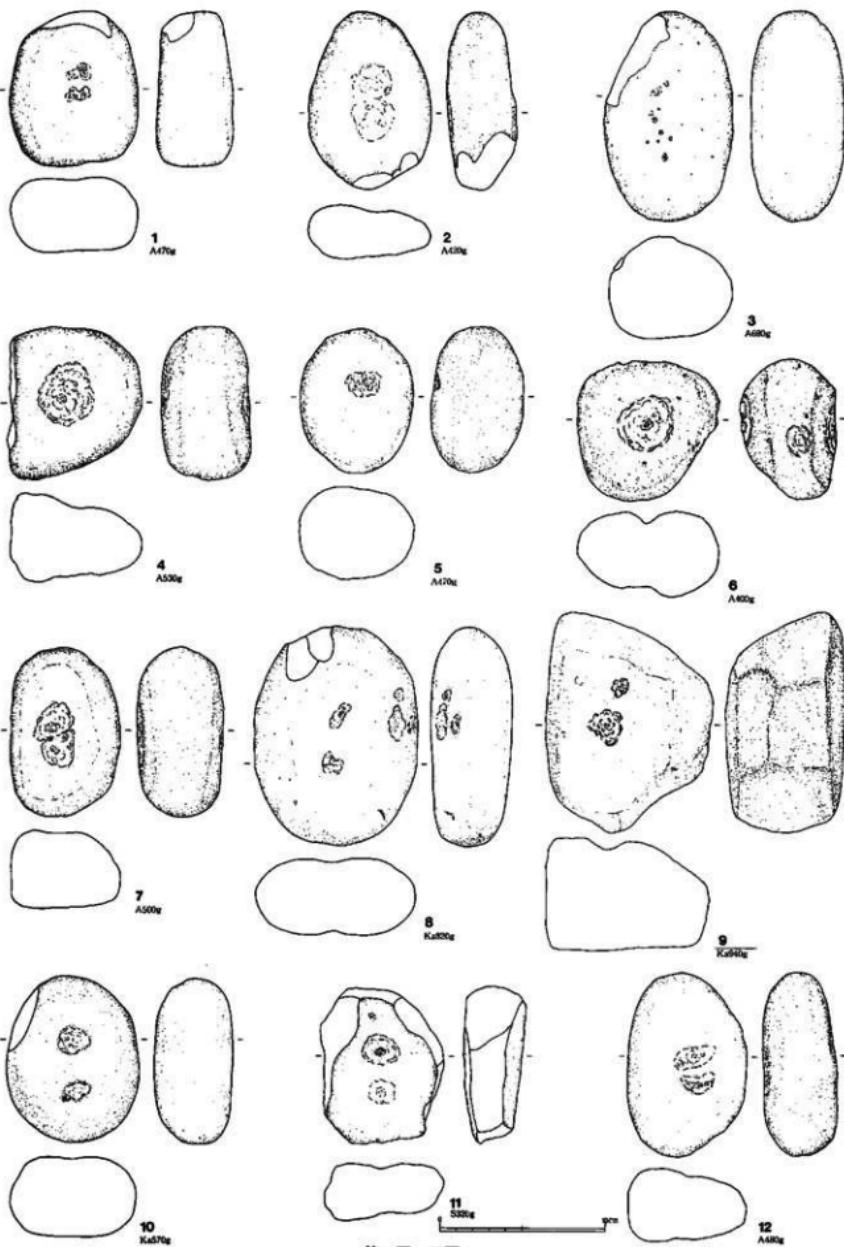
第46図 石皿



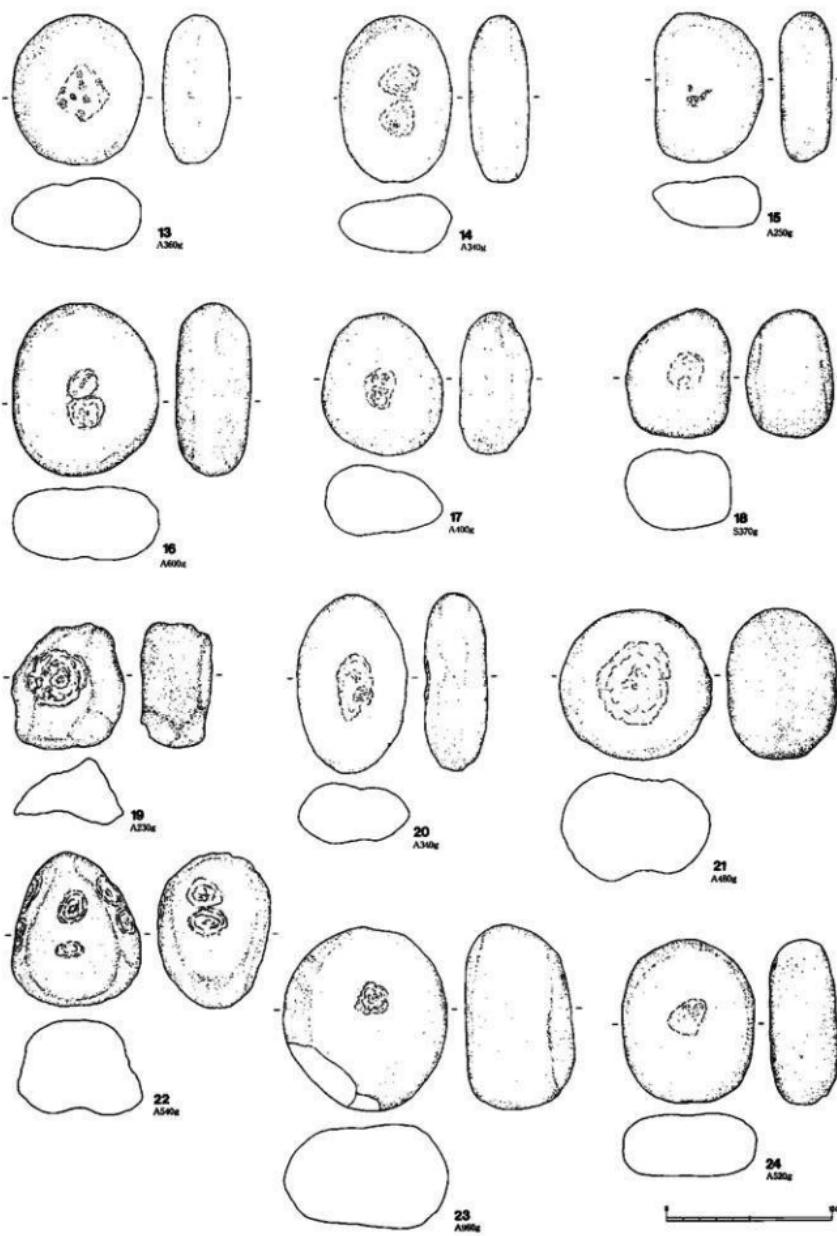
第49図 磨石 1



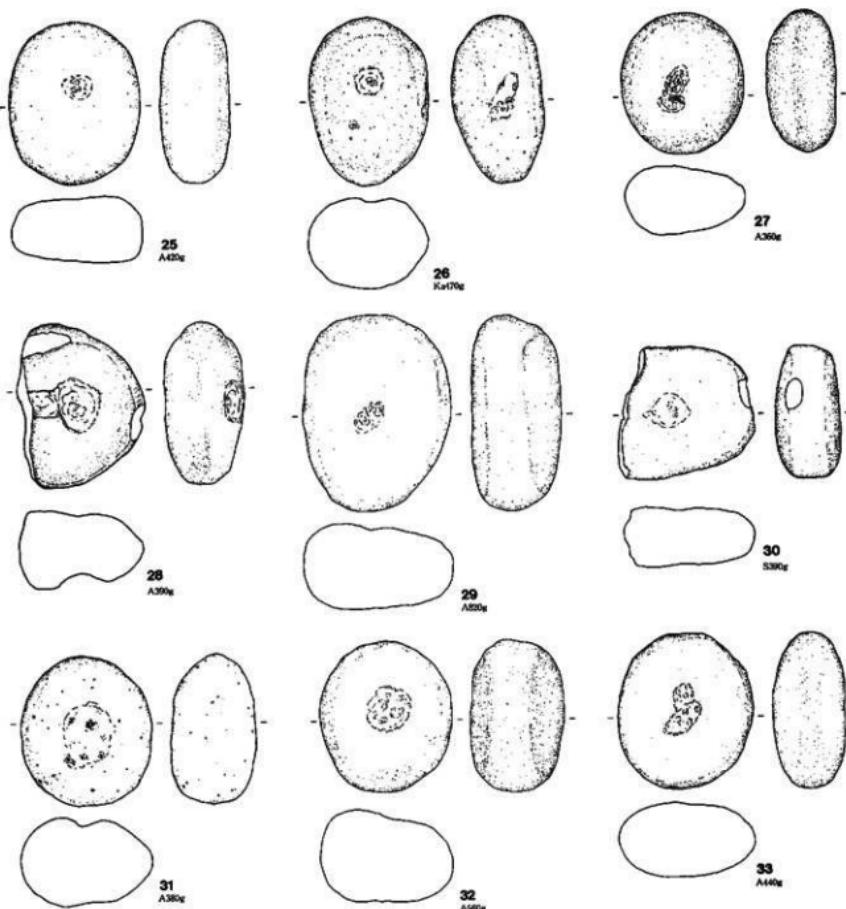
第50図 磨石 2



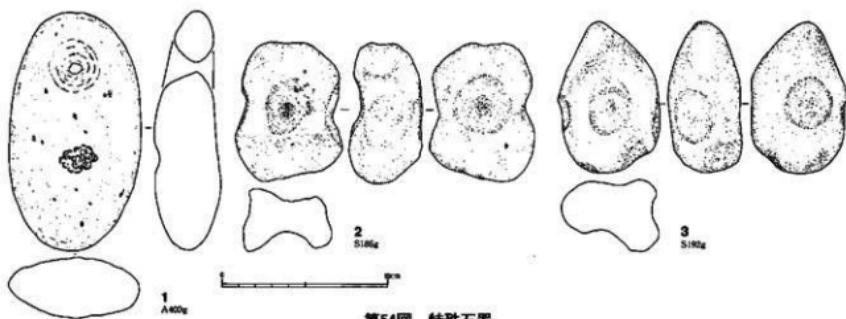
第51図 四石 1



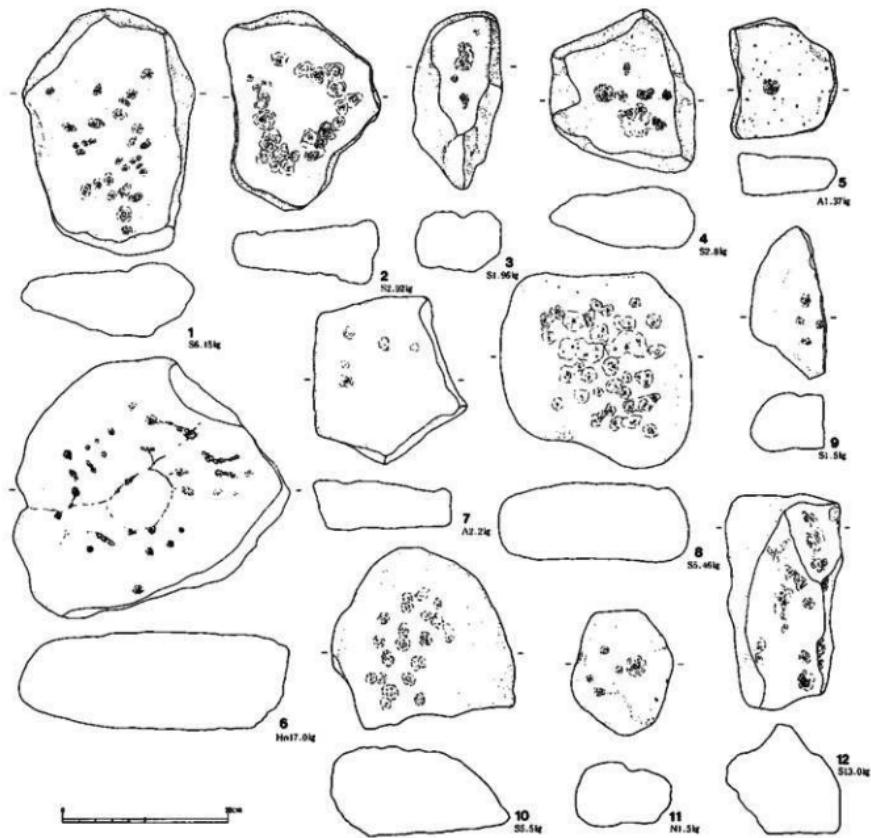
第52図 固石2



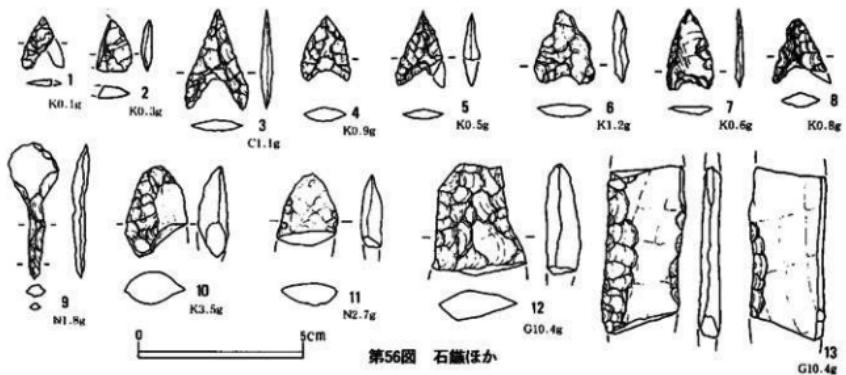
第53図 凹石3



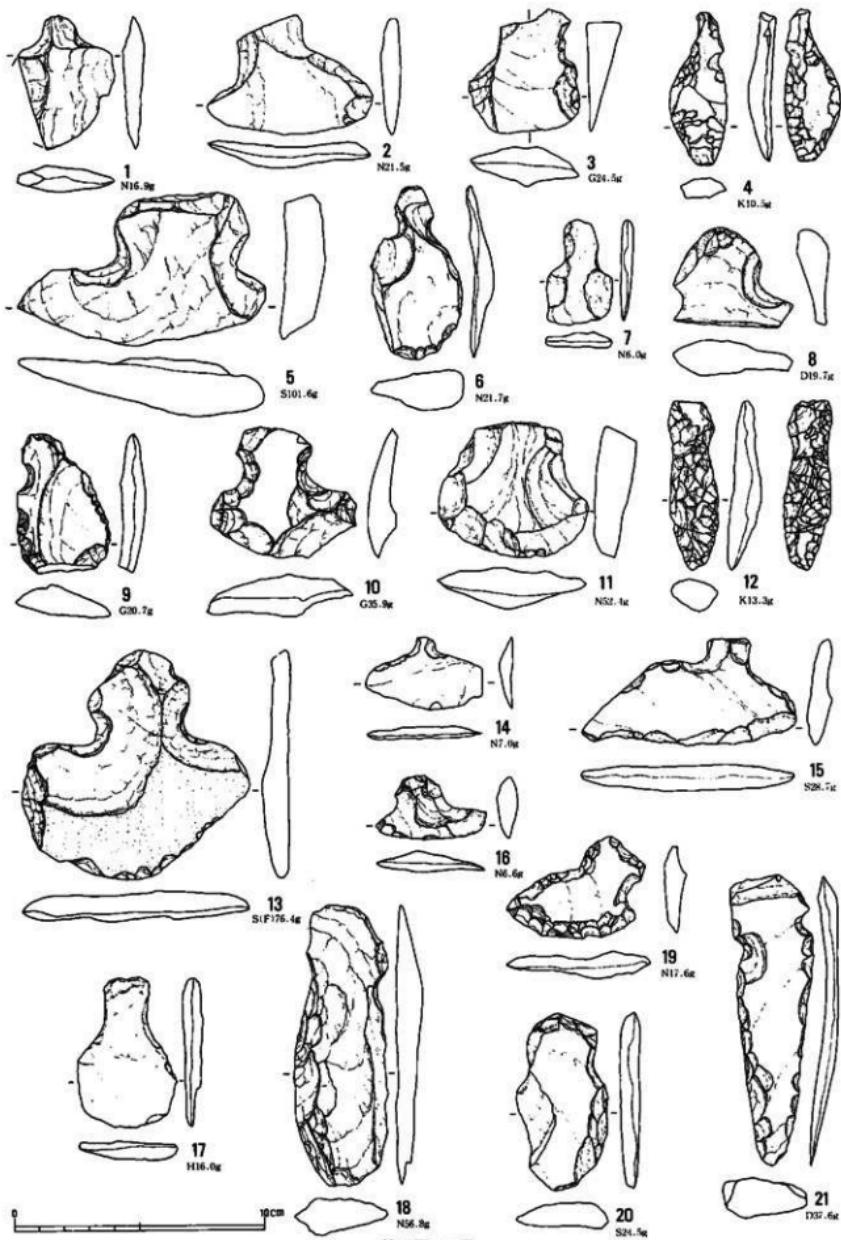
第54図 特殊石器



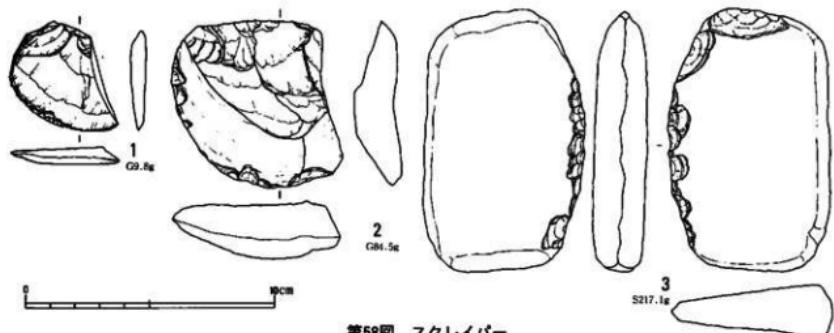
第55図 多孔石



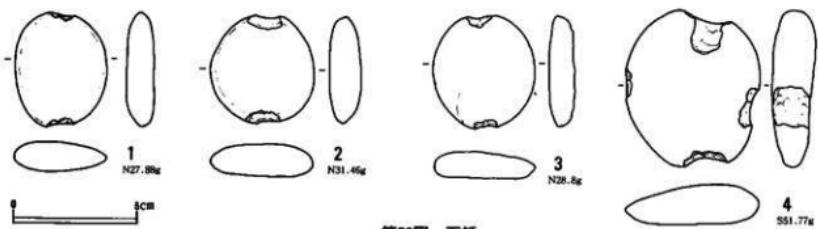
第56図 石蓆(ほか)



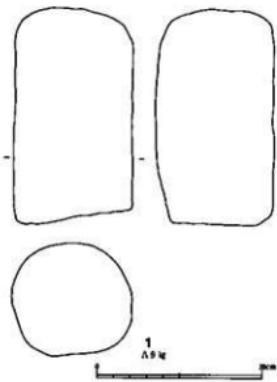
第57圖 石器



第58図 スクレイパー



第59図 石鏃



第60図 石棒

表1 造構遺物対照表 その1

種類\遺物名	1号住	2号住	3号住	4号住	5号住	6号住	7号住	8号住	9号住	10号住	11号住
土器	1	2~6	7~16	17~24	25~40	41~44	45~49	50~58	59~62	63~68	69~74
土偶				1~3	4						
土器片						8			9		
土鉢			7								
土製円盤		1		2~7	8~11	12		13~14		15	
打撲石斧	1~3	4~13	14~18	19~42	43~54	55~56	57~61	62~65	66~71	72	73
磨製石斧		1~2	3	4~5	6~7		8		9	10~11	
磨石				1~18~21	2~5~22	6~7		8		19	20
石皿				1~2	3	4	5				6
凹石	1	2~6		7~11	12~14	15		16~18	20~23		
特異石器								2~3		1	
乡孔石	1			2	3~7		8~9		10	11	
石鏡		2					3		4	5~7	
石匙	1	2		3~10				11	12~13		
スクリーパー				1	3						
石鏡						9					
石鍬		1					2		3~4		
尖頭器状						10					
二次加工剝片		12		13							

種類\遺物名	12号住	13号住	1 土	2 土	3 土	4 土	5 土	6 土	1単埋	2単埋	G・表様
土器	75~76		77	78~80	81	82			99	100	83~98
土偶											5~6
土器片											
土鉢											
土製円盤											16~23
打撲石斧	74			75~76				77	78~80		81~131
磨製石斧			12								13~21
磨石					9~10						11~17
石皿					7						
凹石	24			25~26							27~33
特異石器											
乡孔石											12
石鏡											1~8
石匙								14			15~21
スクリーパー											2
石鍬											
石鍬	1										11
尖頭器状											
二次加工剝片											

表2 第25図~第34図(土器)

番号	出土位置	備考									
1	1住		2	2住	埋甕	3	2住		4	2住	
7	3住	埋甕	8	3住	埋甕	9	3住	埋甕	10	3住	
13	3住		14	3住		15	3住		16	3住	
19	4住		20	4住		21	4住	床直	22	4住	
25	5住	埋甕	26	5住	床直	27	5住		28	5住	床直
31	5住		32	5住		33	5住		34	5住	
									29	5住	床直
									35	5住	
									36	5住	床直

37	5住	床直	38	5住		39	5住		40	5住		41	6住	埋甕	42	6住	
43	6住		44	6住	床直	45	7住	床直	46	7住		47	7住	床直	48	7住	
49	7住	床直	50	8住		51	8住		52	8住		53	8住		54	8住	
55	8住		56	8住		57	8住		58	9住	床直	59	9住	床直	60	9住	床直
61	9住	床直	62	9住	床直	63	10住	炉体	64	10住		65	10住	床直	66	10住	床直
67	10住	床直	68	10住		69	11住	埋甕	70	11住	床直	71	11住	床直	72	11住	床直
73	11住	床直	74	11住	床直	75	12住	埋甕	76	12住		77	1土	床直	78	2土	
79	2土		80	2土		81	3土	床直	82	4土		83	グリッド		84	グリッド	
85	グリッド		86	グリッド		87	グリッド		88	グリッド		89	表採		90	表採	
91	表採		92	表採		93	表採		94	表採		95	表採		96	表採	
97	グリッド		98	表採		99	1單埋甕		100	2單埋甕							

表3 第35図(土偶・土鉢・土器片鱗)

番号	出土位置	備考	番号	出土位置	備考	番号	出土位置	備考	番号	出土位置	備考	番号	出土位置	備考	番号	出土位置	備考
1	4住		2	4住		3	4住		4	5住		5	グリッド		6	表採	
7	4住		8	6住	16.5g	9	9住	8.6g									

表4 第36図(土製円盤)

番号	出土位置	重量															
1	2住	16g	2	4住	4.7g	3	4住	16.9g	4	4住	18.3g	5	4住	9.1g	6	4住	36.1g
7	4住	8.1g	8	5住	13.4g	9	5住	20.8g	10	5住	23.2g	11	5住	21.9g	12	6住	25.7g
13	8住	22.3g	14	8住	14.4g	15	10住	11.3g	16	グリッド	12.7g	17	グリッド	15.1g	18	グリッド	17.2g
19	グリッド	15.9g	20	グリッド	12.2g	21	グリッド	17.5g	22	グリッド	5.4g	23	グリッド	7.1g	表採		16.6g
	表採	11.7g															

表5 打製石斧(第37図～第45図以外)

出土位置	形態	器長	器幅	器厚	重量	遺存度	破損方向	石材	備考	出土位置	形態	器長	器幅	器厚	重量	遺存度	破損方向	石材	備考
2住	短縫	82.0	41.5	14.5	70.4g	刃	欠	粘板岩		8住	短縫	79.0	36.5	18.0	69.3g	基欠・刃欠	1	?	
11住	短縫	77.0	29.0	9.0	31.8g	完	形			表採	擦	75.0	52.0	15.0	77.2g	基欠	1	砂岩	
表採	短縫	78.0	41.5	18.0	92.2g	完	形	砂岩		表採	短縫	118.0	39.5	11.0	85.6g	刃欠		粘板岩	
表採	短縫	115.0	42.5	16.5	111.8g	完	形	粘板岩		表採	短縫	97.5	39.5	17.5	85.3g	1/2		粘板岩	
表採	短縫	82.5	39.5	16.0	69.4g	刃	欠	粘板岩											

表6 磨石(第49・50図以外)

出土位置	器長	器幅	器厚	重量	石材	備考	出土位置	器長	器幅	器厚	重量	石材	備考
2住	36.0	30.5	20.5	40.0g		全面磨り	2住	37.0	33.5	26.5	40.0g		全面磨り
5住	67.0	49.0	18.5	95.0g		片面磨り	5住	118.0	83.0	39.0	590.0g		全体を磨り整形
5住	91.0	72.5	38.0	390.0g		片面磨り	7住	100.0	98.0	44.5	665.0g	安山岩	多少凹みあり
8住	111.5	91.5	46.0	615.0g		片面磨り	8住	85.5	40.0	37.5	180.0g		1/3残存
8住	116.0	84.5	23.5	300.0g		片面磨り	9住	66.5	47.5	18.0	70.0g		片面磨り
10住	99.5	77.0	44.0	460.0g			10住	110.0	80.0	32.0	460.0g	花崗岩	片面磨り
グリッド	106.5	92.0	37.5	490.0g		多少凹みあり	グリッド	111.0	83.5	34.5	480.0g		片面磨り
グリッド	92.0	52.5	39.5	240.0g		両面磨り凹みあり	グリッド	127.0	95.0	43.0	690.0g		片面磨り凹みあり

出土位置	器長	器幅	器厚	重量	石材	備考
グリッド	37.5	35.0	27.0	40.0g		磨りあり
表採	73.5	54.0	42.0	250.0g		片面磨り
表採	77.0	46.5	45.5	200.0g		全面磨り
表採	71.5	45.0	38.5	140.0g		片面磨り?
表採	84.0	67.0	55.0	440.0g		両面磨り
表採	79.5	50.0	33.0	170.0g		片面磨り
表採	75.0	46.0	42.5	200.0g		両面磨り?
表採	148.0	74.5	50.5	805.0g		片面磨り

## 第IV章 まとめ

本遺跡では、今回の調査で13軒の住居跡と6基の土坑、2基の単独埋甕が確認されたが、思いがけず旧石器時代の遺物を確認でき、また、打製石斧が非常に多い集落であることなども判明した。これまで、ほとんど発掘調査の実施されたことのない地域であったため、さまざまな意味で比較の基礎になるものと考えられる。これらを踏まえ、調査や整理を通して気づいたことについて2・3触れ、まとめとしたい。

### 第1節 遺構の変遷について

まず、このエリアにおける遺構の変遷を整理することとする。確認された遺構のうち、遺物が全く出土せず、時期不明のものについては対象から外さざるを得ないが、床面直上や埋甕、炉体土器などが多く、覆土の遺物だけである場合については、住居跡の切り合いなどから時期を限定した。その結果、対象となったのは、住居跡11軒、土坑4基、単独埋甕2基であり、第61図にその変遷を示した。

井戸尻Ⅲ式期——住居跡3軒・土坑2基・単独埋甕1基。

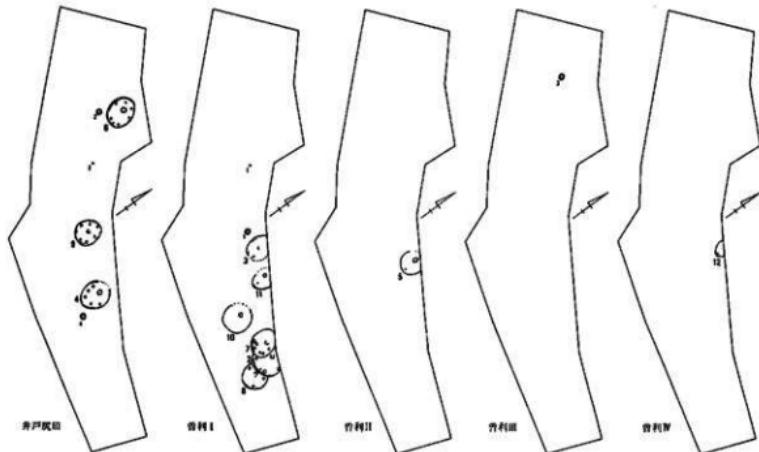
曾利I式期——住居跡6軒・土坑1基・単独埋甕1基。

曾利II式期——住居跡1軒。

曾利III式期——土坑1基。

曾利IV式期——住居跡1軒。

このように、遺構は井戸尻Ⅲ式期～曾利IV式期までに限られている。この中で最も多くの遺構が確認されているのが曾利I式期である。井戸尻Ⅲ式期がこれに次いでいる。ただし、このなかには、井戸尻Ⅲ式～曾利I式期という曖昧な位置付けがふさわしい時期の遺構（4号住居跡、11号住居跡、1号単独埋甕など）も存在する。いずれにしても、井戸尻Ⅲ式～曾利I式期という時期で括ってみると、実に8割以上の遺構が集中することになる。このように本遺跡は極めて限定された時期に営まれた集落とすることができる。そして、この時期以降は急速に衰退することになる。



第61図 遺構変遷図

これまで県内では、井戸尻III式期～曾利I式期を中心とした集落は確認例が少ない。最近、各地で増してきつある（境川村一の沢遺跡群、大泉村甲ッ原遺跡など）ものの、曾利II式～III式期に集落のピークをむかえる傾向が強いようである。本遺跡のような事例は地域的な理由によるものなのかもしれないが、今後の検討課題である。

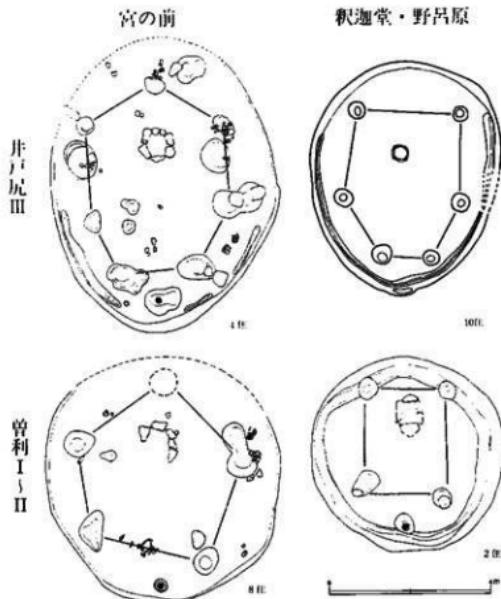
## 第2節 井戸尻III式期の住居型式について

井戸尻III式期の住居跡は柱穴の配置がはっきりしている。3軒の住居跡には、埋甕あるいはそのピットのあるもの（4号、6号住居跡）と無いもの（9号住居跡）の違いこそあるものの、炉と埋甕を結ぶ主軸がはっきりしており、7本柱穴となっている。多少のズレはあるものの、線対称の3組と主軸上の奥壁沿いに1本が存在する型式である。

第62図には本遺跡と、同じ甲府盆地南縁台地（扇状地）上に位置する糸迦堂・野呂原遺跡の同時期の住居跡の柱穴比較を示した。県内の縄文時代住居跡の柱穴位置を詳細に観察した櫛原功一氏は、井戸尻III式期の住居跡では、橢円形よりも円形プランが多くなり、6本主柱が主体であるという。また、曾利I式期も同様であるとしている。櫛原氏の柱穴変化の状況観察は県内の豊富な資料に基づくものであり、山梨県下の傾向と認識できるものであろう<sup>11</sup>。ところが、本遺跡での井戸尻III式期の状況は、確認された3軒がいずれも同じ7本柱穴であり、しかもプランが橢円形である可能性が大きい。ただし、櫛原氏によれば、橢円形で主軸上に7本の柱穴を有するタイプは、藤内式期から出現していくことと、井戸尻式期に同じ型式が保たれることは十分考えられる。このことは見方を変えれば、極めて小さなエリアでの地域的特色と言えるものなのかもしれない。長野県茅野和田遺跡の集落の検討を行った末木健氏も同様の指摘をしている<sup>12</sup>。

井戸尻III式期以外の時期の住居跡は柱穴の配置のはっきりしないものが多いが、曾利I式～II式期の8号住居跡は5本である可能性が大きい。また、曾利II式期の5号住居跡も同様である。野呂原遺跡でも曾利I式期で明瞭な柱穴配置のものが存在しないため、曾利II式期の典型的な円形4本柱の住居跡を示した。これらはいずれも円形であり、4ないし5本柱は甲府盆地周辺では多く確認されている。8号住居跡例は最も一般的な例といえるものであろう。櫛原氏によれば、曾利I式期は井戸尻式から引き続いている円形・6本柱が主体であるとのことであるが、本遺跡で井戸尻III式期にまだ（藤内式期から引き継がれる）橢円形・7本柱型式が残されていることからすれば、本遺跡での今回の調査では確認されていないものの、さらに曾利I式期にも7本型式が引き継がれることも考えられよう。

櫛原氏は曾利I式期までの住居型を中期



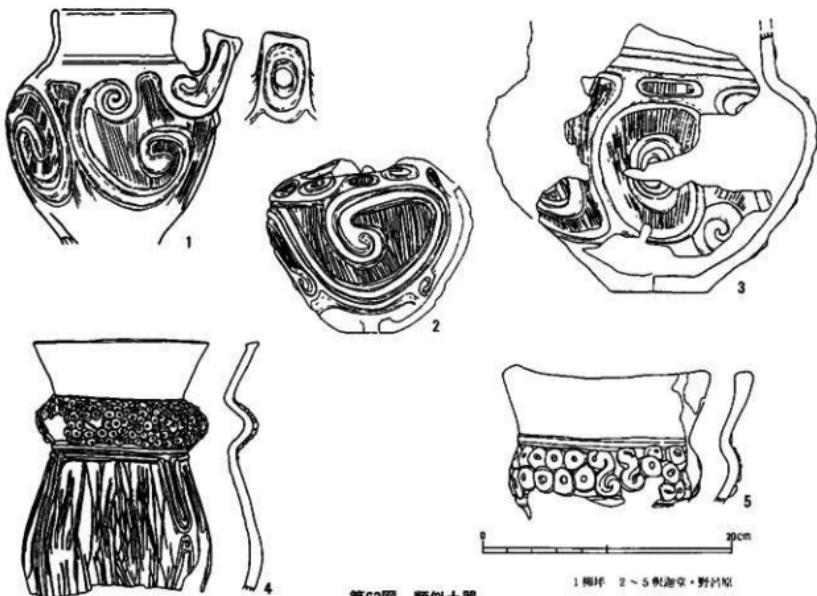
第62図 住居型式

前半型住居様式、曾利II式期以降の住居型を中期後半型住居様式と呼び、大きく区別している。氏は住居型の系統性は集落の連続性によるものと見通しを立てているが、それからすると曾利I式期と曾利II式期で大きな画期があったことになる。この「大きな画期」とは、柳原氏が指摘しているように、例えば曾利II式期における加曾利E II式の、あるいは曾利V式期における加曾利E IV式の影響などを示すが、特に曾利V式期においては柄鏡形敷石住居跡と加曾利E IV式土器が席巻する状況はそれを端的に示しており、集落も土器も全く別系統のものとして捉えることができる。

このような状況で、元々の在地の土器をみてみると、藤内式から井戸尻式、曾利様という土器型式の流れが連綿と続いている。詳細にみてみれば、井戸尻皿式から曾利I式の連続性、さらに曾利I式から曾利II式への連続性は土器文様からは明らかである。確かに土器だけに限ってみても、曾利I式と曾利II式での明瞭な変化は有孔鉢付土器をはじめいくつか確認できる。しかし、文様等の継続性は強い。土器文様の継続性（あるいは继承性と言っても良いだろう）は、まさに一定のエリア内の有機的集団によって成されるものであるはずである。それらを含め、実際には曾利I式期と曾利II式期とで、集落も土器も全く切れてしまうような状況ではない。これを合理的に解釈するならば、例えば前段階とは全く異質な集団の移入という状況（前段階とつながらない異質な集落の存在）を受容しつつ、やがてそれらが在地化して行く中で、元々の在地の土器もゆるやかに変化していく、という段階であるということになる。当然このような人の移動はこの時期に限ったものではないはずであるが、とくに強く影響を及ぼした時期の一つとして曾利I式～曾利II式期を捉える必要があろう。

### 第3節 76及び94の土器について

76と94は器形や文様が特異であり、ここで触れておきたい。76は片口？としておいたが、小破片からの復元実測であるため、確実ではない。また、94は頸部の膨らんだ深鉢であるが、この部分に粘土粒を円形に貼付し、中



第63図 類似土器

心に刺突を行っている。吸盤状の貼付文とでも言えようか。第63図には、これまで県内で出土した類似資料を示した。

1～3は76類似資料として示したものである。1は北巨摩郡長坂町柳坪遺跡、2・3は東八代郡一宮町駅廻堂遺跡群・野呂原遺跡からの出土資料で、いずれも曾利IV式期に位置付けられる。1・3は壺、2は鉢または片口と思われる。このように曾利IV式期以外の時期にはあまり見かけない器種が散見される。

4・5は94類似資料として提示したもので、いずれも駅廻堂遺跡群・野呂原遺跡出土である。これらの資料は、いずれも井戸尻III式末～曾利I式初期にかけて存在するもので、類例は多くはないものの諏訪湖周辺から甲府盆地にかけて分布が認められる。

#### 第4節 遺構別石器組成について

本調査において出土した石器の総数は297点となった。この内、剝片・碎片・石核を除いた各器種について遺構との係わりを若干検討し、まとめとする。

器種を問わず個体数のみでみてみると、1号から12号住居跡までの傾向として10点前後が平均的な出土量となっている。4号住居跡では出土総数45点と他の住居と比較してその量は多く特徴的である。これに対して、11・12号住居跡は出土総数各2点と少なく対称的な出土状況にある。

器種別にみると、各住居跡の全てに観察されるものは打製石斧のみである。上述した4号住居跡は、やはりその出土数も多く最多の24点であり、対する11・12号住居跡は各1点と少ない。他の器種については、住居跡とは関係なく出土状況は様々である。但し、打製石斧の出土量の多い住居跡では、他の器種の出土量も比例して増加する傾向も観察される。

時期的には、第61図の遺構変遷を軸に比較してみると、4号住居跡と6号住居跡などは、出土した土器から同時期の住居跡とされるが、石器組成からみると共通性すら認められない。2号住居跡と3号住居跡も時期関係は同じながら石器組成は対称的である。

##### 註

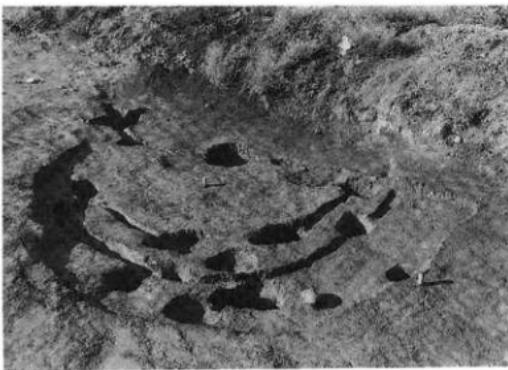
- 1) 橋原功一 1989 「縄文時代の住居形態と集落」『山梨考古学論集II』 p191～222山梨県考古学協会
- 2) 末木 健 1989 「縄文時代中期の隣接集落構造」『甲斐の成立と地方的展開』 p7～24角川書店

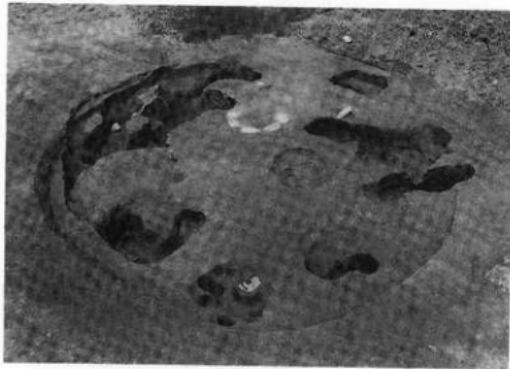
##### 参考文献

- 阿部朝衛 「新潟県関川村荒川台遺跡第1次調査報告」『法政考古学』18集、1992、法政考古学会  
調布市原山遺跡調査会『はらやま』1993

# 図 版

圖版 1 調查風景 1号・13号住居跡 3号・5号・12号住居跡



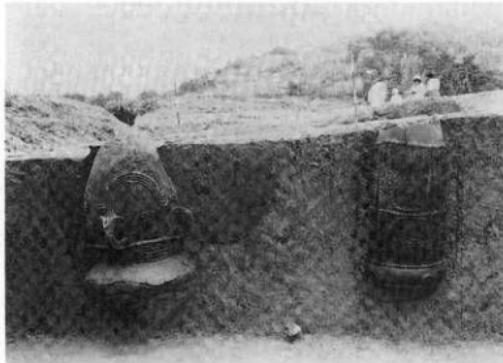
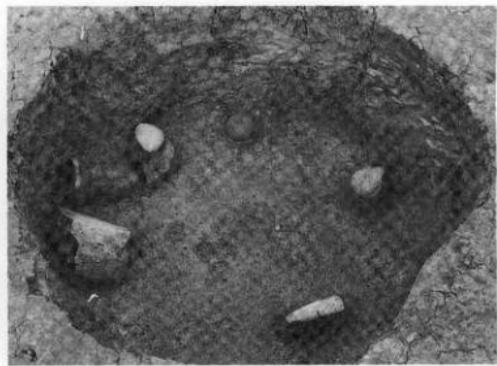
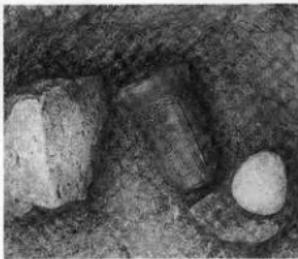


图版 3

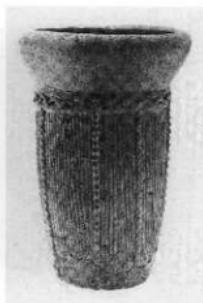
8号住居跡

11号住居跡

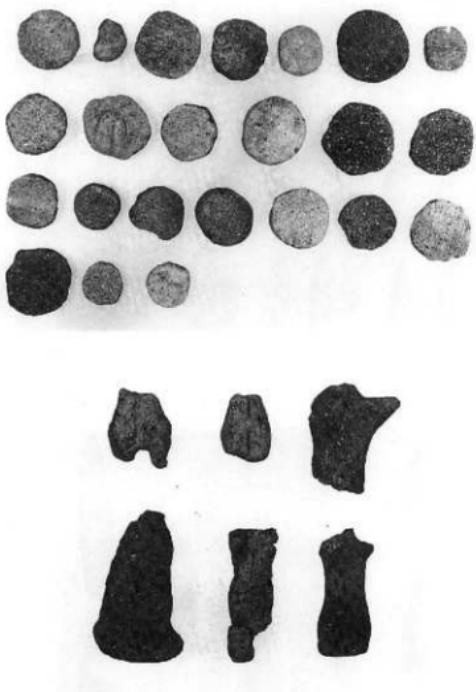


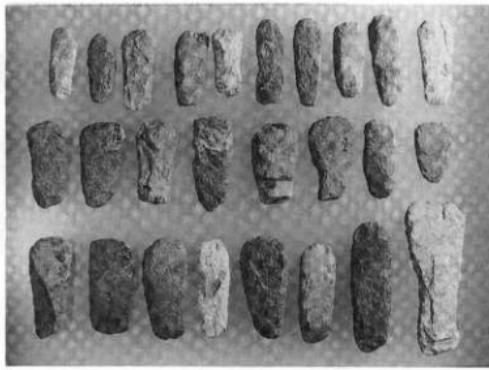
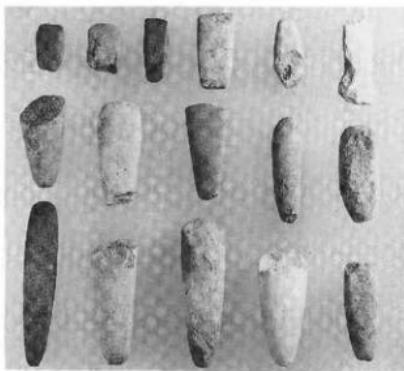
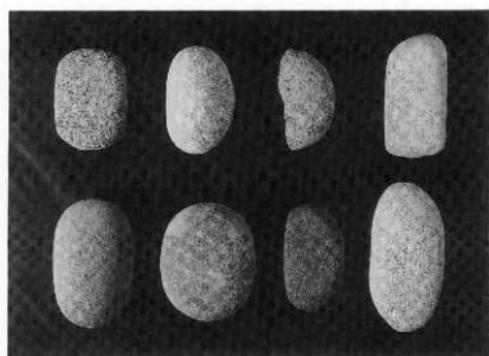




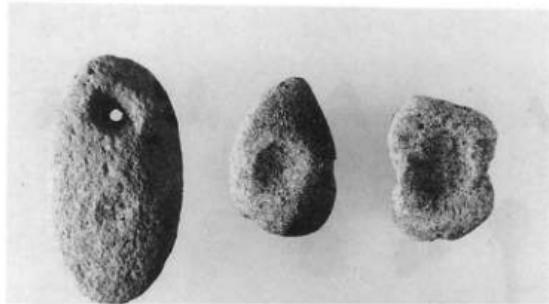


図版7 土製円盤 土偶 旧石器時代石器（尖頭器・細石刃核・細石刃）

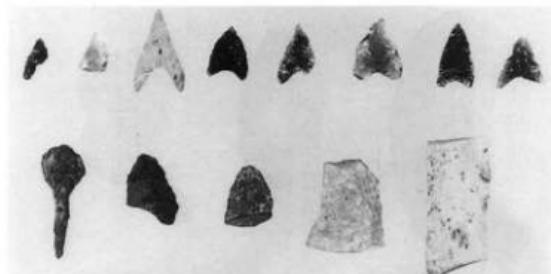
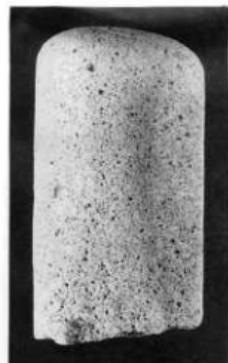




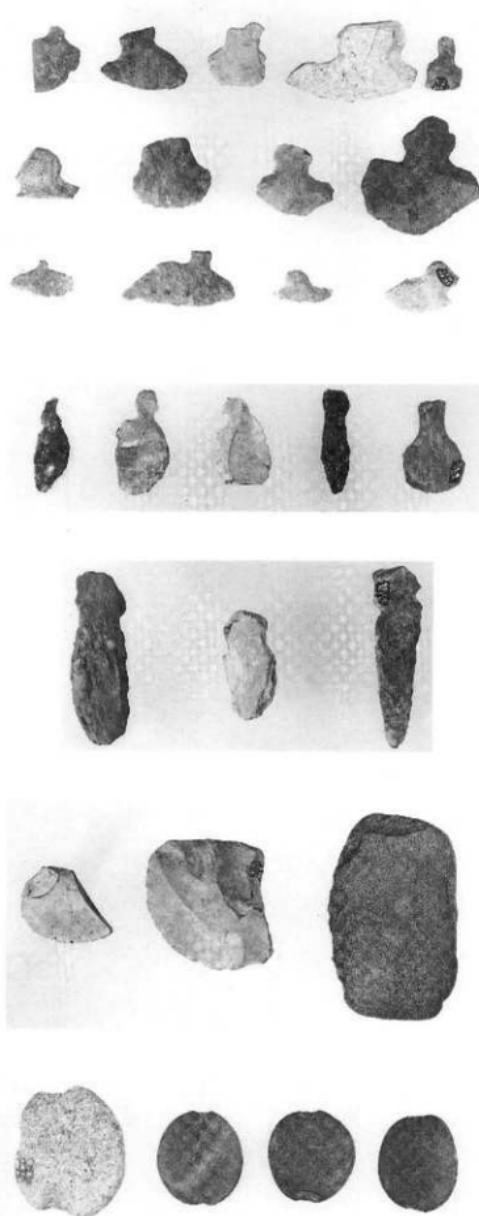
図版9 凹石 特殊石器



石皿 多孔石 石棒 石鑿 ドリル 尖頭器状  
二次加工剥片



図版 11 石匙 スクレイパー 石鍤



## 報告書概要

フリガナ	ミヤノマエイセキ	
書名	宮の前遺跡	
副題	山梨県警察本部ヘリポート建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告第107集	
著者名	長沢宏昌・宮里学	
発行者	山梨県教育委員会	
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター	
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根923 0552-66-3881	
印刷所	佛少国民社	
発行日	1995年3月31日	
ミヤエイセキ	所在地	西八代郡市川大門町大木東沢
宮の前遺跡	2500分の1地図名・位置・標高	鍛沢 東経138°28' 北緯35°32' 350m
概要	主な時代	旧石器時代・縄文時代中期
	主な遺構	住居跡13軒（井戸尻Ⅲ式期～曾利Ⅰ式期が9軒、他は曾利Ⅱ式期～Ⅳ式期）・土坑6基 大型単独埋葬2基（井戸尻Ⅲ・曾利Ⅰ各1基）
	主な遺物	縄文時代中期土器、石器（大量の打製石斧の他、磨製石斧・磨石・石皿・凹石・石錐 スクレイパー等） 旧石器時代石器（グレイバー、細石刃等）
	特殊遺構・遺物	特殊石器 細石刃核
調査期間	1987年7月19日～9月14日	

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第107集

印 刷 日 1995年3月20日

発 行 日 1995年3月31日

### 宮の前遺跡

山梨県警察本部ヘリポート建設に伴う  
発掘調査報告書

発 行 山梨県教育委員会

印 刷 株式会社少国民社

